

# 大阪府教育委員会文化財調査事務所年報

1

1998. 3

大阪府教育委員会



## はじめに

文化財とりわけ埋蔵文化財を取り巻く状況は、連日新聞紙上やテレビで取り上げられるなど、大きく注目されており、また、現在ほど文化財の活用が叫ばれ、注目された時代はかつてなかったと思います。吉野ヶ里遺跡や三内丸山遺跡は、遺跡の調査と整備が町おこしの有力な方法の一つであることを示した好例でありましょう。

ところで、それらの社会的に広く注目を集めた遺跡の調査は、一人その遺跡の調査によってのみ成り立っているものではありません。一つの遺跡の評価のためには、最低限、時間軸と空間軸を基軸とした、周辺遺跡の調査成果が必要不可欠です。即ち世間の耳目を集め遺跡の調査も、多くの有名無名の遺跡の調査成果に支えられているのであり、その逆もまた真であります。

文化財を有意義なものとして活用するためには、不断の調査が必要です。その成果は、速やかに整理され、かつ良好に保存されつつ、公開されなければなりません。しかも、現在の社会状況によって生み出された緊急に調査を要する文化財は、埋蔵文化財だけに止まりません。このような状況に対処するため、大阪府教育委員会では、平成9年4月、文化財調査事務所を開設いたしました。

当課としては、文化財調査事務所を拠点に、より広範な分野について調査を実施し、文化財のより有意義な保存と活用に努力する所存であります。

最後に、文化財保護行政並びに文化財調査事務所の開設にご援助・ご協力いただいた関係者の皆様に篤く御礼申し上げますと共に、今後とも、暖かいご支援をお願い申し上げます。

平成10年3月31日

大阪府教育委員会文化財保護課長

鹿野一美

## 例　　言

1. 本書は、大阪府教育委員会文化財調査事務所年報の第1冊である。
2. 大阪府教育委員会文化財調査事務所は、埋蔵文化財発掘調査等、文化財保護課の実施する文化財調査を担当するため、大阪府教育委員会文化財保護課の分室として、平成9年4月1日に開設された。
3. 本書の第2・3表には、平成8年度に大阪府教育委員会文化財保護課が実施した埋蔵文化財調査のすべてを掲載している。なお、同表中実施面積欄の単位は「m」である。
4. 主要な調査については、概要報告を掲載した。各概要報告の表題に示す数字列並びに番号はそれぞれ以下の内容を示している。なお、概要報告表題の調査番号は、第2・3表の調査番号と一致する。

遺跡名（平成8年度調査番号）

- (1) 所在地
- (2) 調査面積
- (3) 現地調査実施時期
- (4) 調査の原因となった事業
- (5) 概要報告執筆者

5. 概要報告の執筆は調査担当者がこれにあたり、「平成8年度における埋蔵文化財調査の概況」は、調査第2係長中井貞夫が執筆した。編集は資料係が担当した。



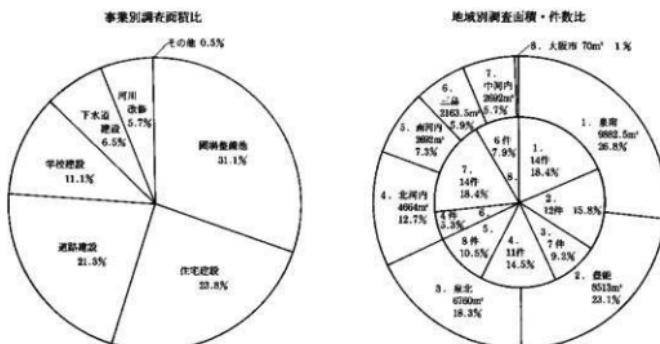
## 平成8年度における埋蔵文化財調査の概況

平成8年度、大阪府教育委員会が実施した調査は、発掘調査・試掘調査・立会調査の合計が76件、40,783m<sup>2</sup>（実際に調査を実施した面積であって、調査対象面積とは異なる。）である。76件40,783m<sup>2</sup>の調査の殆どは、大阪府農林水産部・土木部・建築部等府営事業によるものであり、事業別の面積比は、圃場整備や溜池改修等農業に関するもの31.1%、府営住宅の高層化による建替え等住宅建設に関するもの23.8%、新設道路建設や歩道設置等道路建設に関するもの21.3%、府立高等学校建替え等学校建設に関するもの11.1%、下水処理場等下水道施設建設に関するもの6.5%、河川改修に関するもの5.7%、その他0.5%となる。

平成7年度に比べて学校建設に伴う調査面積が少くなり、圃場整備関連事業と府営住宅建設に伴う調査面積の比重が大きくなっている。道路建設に伴う調査は、関西国際空港関連・国体関連等の道路建設が一段落した。今年度は、歩行者の安全や交通渋滞の緩和を目的とした歩道設置や道路拡幅工事に伴う小規模な調査が主流となり、その上、下水道管渠工事に伴う竖孔等の調査が多くなった。その結果、前年度に比べて、調査件数は増加したが、その反面調査面積は少なくなった。

下水道管渠敷設に伴う竖孔に伴う10~100m<sup>2</sup>の小面積でしかも夜間調査という悪条件の中での点の調査、歩道設置や河川改修などに伴う線の調査が多く、このような点や線の小規模の調査（試掘調査・立会調査を含む）は、平成8年度の調査件数全体の約70%を占めている。小規模調査の成果は、即時に得られる物ではなく、長年の調査の積み重ねによって、徐々に遺跡の範囲・時代・深度・性格等の調査成果が得られる物である。今後も、小規模面積の調査も疎かにせず地道に継続していく必要がある。

各地域別に調査件数を見ると、大阪市域と三島地域がやや少ないが他の地域はほぼ同じである。調査面積は、泉州・豊能・泉北・三島の順となるが、調査の起因となつた事業は各地域によって異なり、各地域の性格をよく顯わしている。豊能地域では圃場整備等農業に関する事業、三島地域では住宅建設事業、北河内地域では道路建設と住宅建設事業、中河内地域では河川改修事業、南河内地域では住宅建設と下水道建設事業、泉北地域では道路建設と圃場整備事業、泉州地域では住宅建設・圃場整備・学校建設事業、大阪市域では試掘調査のみであった。



第1図 事業別・地域別調査面積比

## 各地域の主要な調査

### 【豊能地域】

調査の殆どが圃場整備事業に起因する。野間遺跡では、昨年に引き続き、地蔵院領「長町庄」の屋敷地の調査を行い屋敷地の約80%を調査することができ、中世における莊園経営の中心建物（庄館）が明らかになった。

倉垣遺跡については、試掘調査の結果、遺跡の範囲がほぼ明らかになった。

### 【三島地域】

総持寺遺跡では、多数の小規模古墳と飛鳥時代から奈良時代の掘立柱建物を検出した。この遺跡において特筆すべきことは、6世紀中頃の須恵器の壺に「調□」の文字が彫られていたことである。「調」は税制の調と考えられ、古代の税である「調」の名称が6世紀中頃まで遡ることが推測できる資料を得られた。

### 【北河内地域】

池田西遺跡と高柳遺跡において、北河内の沖積平野で初めて弥生時代後期の堅穴住居が発見された。高柳遺跡で発見された住居跡は保存状況がよく、柱根も残り、住居の壁構造が判る数少ない堅穴住居の一つである。

### 【中河内地域】

田井中遺跡と木の本遺跡は、共に平野川改修に伴う調査であり、点と細長い線の調査であり、今後、調査の継続によって河内平野に点在する遺跡の範囲が明らかになってくるだろう。

### 【南河内地域】

新堂廃寺の調査では、8世紀中葉から9世紀中葉に寺の東側と集落を画する溝が検出され、前回の調査で検出された溝と繋がると推測される。

### 【泉北地域】

陶器南遺跡では、中世の大型掘立柱建物が検出された。建物の妻側の床面が火を受けて赤変しており、また、焼土塊や炭が多量に検出された。建物の機能を考える上で貴重な資料となるであろう。

### 【泉州地域】

秦庵寺・麻生中下代遺跡は、7世紀前半から中葉にかけての堅穴住居と掘立柱建物、7世紀後半から8世紀前半の掘立柱建物が検出された。秦庵寺に関する遺構は、寺域南限を画する溝の一部を確認した。掘立柱建物は、秦庵寺を造営した氏族の居住地と考えられる。

豊能		三島	北河内	中河内	南河内	東北	東南	大阪市	合計
道路	件数	2	1	4	2	0	3	4	0 16
建設	面積(m <sup>2</sup> )	40	20	2,604.50	67	0	5,266.00	873	0 8,870.50
学校	件数	0	0	2	1	1	0	1	2 7
建設	面積(m <sup>2</sup> )	0	0	10	36	4	0	1,750.00	44 1,844.00
施場	件数	10	0	0	0	0	2	3	0 15
整備等	面積(m <sup>2</sup> )	8,473.00	0	0	0	0	1,480.00	1,586.00	0 11,539.00
住宅	件数	0	1	3	2	3	1	2	3 15
建設	面積(m <sup>2</sup> )	0	2,130.00	2,014.50	100	1,022.00	4	5,412.00	14 10,696.50
河川	件数	0	0	2	6	0	1	0	0 9
改修	面積(m <sup>2</sup> )	0	0	35	1,693.60	0	10	0	0 1,738.60
下水道	件数	0	2	0	2	2	0	1	0 7
建設等	面積(m <sup>2</sup> )	0	13.5	0	192.5	1,600.00	0	142.5	0 1,948.50
その他	件数	0	0	0	1	2	0	3	1 7
	面積(m <sup>2</sup> )	0	0	0	10	66	0	119	12 207
合計	件数	12	4	11	14	8	7	14	6 76
	面積(m <sup>2</sup> )	8,513.00	2,163.50	4,664.00	2,099.10	2,692.00	6,760.00	9,882.50	70 36,844.10

第1表 平成8年度調査件数・調査面積

調査番号	道路名	所在地	種別	調査開始	調査終了	実施面積	担当者	事業名
96001	田井中道路	八尾市空堀1丁目	免耕	BB.4.1	BB.9.20	680	亀島東則	平野川改修
96002	正法寺跡	四条畷市清風正法寺	免耕	BB.4.24	BB.8.22	150	山上 弘	打上バイパス建設
96003	原屋瀬跡	四条畷市原屋瀬北町1-1	立会	BB.4.24	BB.4.25	10	佐久間貴士	西心懶高等学校ガス管埋設
96004	東郷・成仏寺道路	八尾市本町	免耕	BB.7.22	BB.10.5	49	地村邦太	主要地方道平野中高安崎拡幅
96005	遺跡外	寝屋川市愛鳥東3丁目	試掘	BB.7.15	BB.7.15	11	阿部幸一	府営寝屋川市愛鳥住宅新築
96006	遺跡外	泉佐野市新安松3丁目	試掘	BB.5.16	BB.5.16	12	大庭康弘	府営羽倉崎住宅改修
96007	寺川道路	大東市寺川5丁目	試掘	BB.6.25	BB.6.25	5	松本清美	大阪生駒線改修
96008	野間道路	豊能郡能勢町野間開拓地	免耕	BB.6.27	BB.9.2.28	5,300	辻本 武	東難波地区整備
96009	龜持寺道路	茨木市三島ヶ丘	免耕	BB.7.15	BB.9.2.28	2,180	山上 弘	府営茨木熊持寺住宅建設
96010	ハイク道路	船明町舟明	免耕	BB.6.27	BB.8.5.5	485	栗 和之	府営農村基盤整備取組第2地区
96011	船田西道路	寝屋川市船田西町	免耕	BB.7.17	BB.3.24	1,999	佐久間貴士	府営寝屋川船田住宅建設
96012	九度神連跡	枚方市牧野本町	試掘	BB.7.23	BB.7.23	28	松本清美	府営牧力牧野住宅地
96013	木の本道路	八尾市山崎1丁目	免耕	BB.7.1	BB.10.4	192	藤澤真也	平野川改修
96014	北島道路	東大阪市中石切7丁目	免耕	BB.10.1	BB.11.30	40	阿部幸一	寝屋川南部流域下水道事業下水管渠整備
96015	久宝寺道路	八尾市西久宝寺323	立会	BB.7.8	BB.7.8	10	松岡良輔	スコアーボード増設
96016	信貴道路	茨木市春日	免耕	BB.7.12	BB.7.19	10	松岡良輔	安威川流域下水管渠整備
96017	鷹巴宮跡新	和泉市鷹巴宮、蒲田町	試掘	BB.7.1	BB.7.3	45	大庭康弘	日本政府農林技術センター機械化開拓地整備
96018	北条西道路	大東市北条6丁目	立会	BB.7.4	BB.7.4	8	中井貴夫	淀川水系谷田川防砂
96019	百舌鳥城南道路	堺市百舌鳥城西之町1丁	試掘	BB.7.9	BB.7.9	10	大庭康弘	二級河川百舌鳥川改修
96020	寺川道路	大東市寺川5丁目	免耕	BB.7.22	BB.10.5	440	地村邦太	主要地方道大阪生駒線改修
96021	灰川安田道路	大阪市鶴見区安田1丁目	免耕	BB.6.21	BB.7.21	65	折本 哲	茨田高等学校エレベーター埋設
96022	野間道路	豊能郡能勢町野間	試掘	BB.6.5	BB.6.5	20	辻本 武	東難波バイパス建設
96023	百舌鳥ミサンガイ古墳	堺市堺ヶ丘中4丁	試掘	BB.8.5	BB.8.7	36	大庭康弘	押かづらぎ踏歩道設置
96024	神正北道路	池田市神田1丁目他	試掘	BB.7.28	BB.8.2	20	松岡良輔	神田池田線改修
96025	成畠遺跡跡地	松原市三宅東3丁目	試掘	BB.7.15	BB.7.15	4	折本 哲	総合科学棟建設
96026	古市大溝跡(1次)	羽曳野市野々上5丁目	免耕	BB.7.30	BB.8.5	44	林口佑子	府営兎曳野住宅建設
96027	木越道路	八尾市西原郡川	試掘	BB.8.21	BB.8.21	15	松本清美	170号歩道設置
96028	太子大溝跡	八尾市南太子堂	試掘	BB.8.12	BB.8.12	12	阿部幸一	千代川改修
96029	善川下流道路	岬町浜坂	試掘	BB.9.10	BB.9.10	143	大庭康弘	南大阪河岸段階下水道接続ポンプ場
96030	心曳遺跡跡地	羽曳野市はびきの3丁目	試掘	BB.9.19	BB.9.20	62	大庭康弘	府立看護大学大学院棟建設
96031	御薙遺跡	東大阪市御薙2丁目	立会	BB.9.4	BB.9.4	36	中井貴夫	府立玉川高等学校レバーハー増築
96032	西国側道路	茨木市郡地	免耕	BB.9.9	BB.9.10	10	松岡良輔	安威川流域下水管渠整備
96033	北島東道路	東大阪市中石切7丁目	免耕	BB.10.1	BB.11.30	110	阿部幸一	寝屋川南部流域下水道事業下水管渠整備
96034	浪速道路	大阪市東淀川区西浪速5丁目	試掘	BB.9.27	BB.9.27	6	大庭康弘	府営浪速第4助田住宅建設
96035	遺跡外	大阪市鶴見区純野1丁目	試掘	BB.5.3	BB.5.3	4	大庭康弘	府営純野住宅建設
96036	難波大通跡跡地	大阪市住吉区河内4丁目	試掘	BB.5.3	BB.5.3	45	大庭康弘	丹波町北住吉建設
96037	堺堀都市場跡	堺市守崎西	試掘	BB.10.15	BB.10.15	4	大庭康弘	府営守崎地住宅建設
96038	南端牛・麻生中下代道路	貝塚市平田	免耕	BB.8.7	BB.9.3.25	5,400	森屋直樹	府営半田庄田建設

第2表 平成8年度調査箇所一覧(1)

調査番号	道路名	所 在 地	種別	調査開始	調査終了	実施面積	担当者	事業名
98039	水間二ノ戸道路	貝塚市水間字二ノ戸	試験	BB.3.10	BB.3.12	187	新井文弘	水間郵便局建設
98040	高月寺跡	北町高月寺84-2地	試験	BB.9.13	BB.9.24	92	新井文弘	高月寺建設
98041	敷市地	羽曳野市尺庭442	試験	BB.10.3	BB.10.3	4	新井文弘	鳥居技術センター増築
98042	唐竹道路	能勢町山内	試験	BB.10.15	BB.3.1	783	東 和之	新宮農村基盤整備歌垣第2地区
98043	池上普通道路	和泉市池上町	試験	BB.8.17	BB.3.25	5,142	新本・西川	池上上下有線建設
98044	海部南北道路	羽市陶器北	試験	BB.12.2	BB.3.14	1,435	山田隆一	海部北地区庁舎整備場整備
98045	岸和田道路	岸和田市岸城町	試験	BB.11.11	BB.11.13	24	山田隆一	一般府道岸和田南篠守鶴見川河床改修
98046	道路外	東大阪市花園	試験	BB.10.21	BB.10.31	50	新本康美	新宮花園住宅整備
98047	吉田通路	東大阪市吉田	試験	BB.10.21	BB.10.31	45	新本康美	新宮河内吉田住宅建設
98048	高柳通路	寝屋川市高柳4丁目	試験	BB.11.20	BB.3.31	2,100	新本康美	寝屋川市高柳千重子寝屋川川端改修
98049	岸和田城跡	岸和田市岸城町10-1	試験	BB.11.6	BB.3.25	2,000	小浜 浩	新立岸和田高等学校校舍整備
98050	男串通路	泉南市男串	試験	BB.11.1	BB.2.14	1,000	上林史郎	新宮地域総合オアシス男串泉南地区・双子池改修
98051	安威通路	茨木市安威	試験	BB.11.26	BB.11.29	24	松岡良喜	新道灰太塚同様改修
98052	吉市大瀬(2次)	羽曳野市野野上5丁目	試験	BB.12.2	BB.1.29	800	新井佐子	新宮羽曳野作庄整備
98053	上ノ郷道路他	泉佐野市上ノ郷他	試験	BB.12.6	BB.12.11	16	藤田道子	木質保キバイライン
98054	轟目道路	泉佐野市上ノ郷	試験	BB.1.31	BB.3.17	556	藤田道子	新宮かんがい排水対策事業(泉佐野地区)
98055	紀州・熊野街道複数地	大阪市洛西区日本橋5丁目	試験	BB.12.11	BB.12.11	12	大室裕弘	沿道整備改善
98056	大鳥塙	大阪狭山市東塙尻8丁目	試験	BB.12.10	BB.12.12	150	大室裕弘	鶴山丸理場第1期建設
98057	阪仄通路	能勢町山内	免査	BB.10.15	BB.3.1	508	東 和之	新宮農村基盤整備歌垣第2地区
98058	坪ノ内道路	能勢町山内	免査	BB.10.15	BB.3.1	110	東 和之	新宮農村基盤整備歌垣第2地区
98059	倉垣地区	能勢町倉垣	試験	BB.10.15	BB.3.25		東 和之	新宮農村基盤整備歌垣第2地区
98060	山内地区	能勢町山内	試験	BB.10.15	BB.3.25	312	東 和之	新宮農村基盤整備歌垣第2地区
98061	長尾通路複数地	能勢町倉垣	試験	BB.10.15	BB.3.25		東 和之	新宮農村基盤整備歌垣第2地区
98062	会野城跡	豊能町会野	立会	BB.1.11	BB.1.20	10	東 和之	町若宮會野古跡
98063	唐竹道路	能勢町山内	試験	BB.10.15	BB.3.25	(312)	東 和之	新宮農村基盤整備歌垣第2地区
98064	津田トッパノ道路	枚方市藤原	試験	BB.12.16	BB.12.26	75	松岡良喜	鶴谷川改修
98065	下田道路	羽市下田町	免査	BB.1.8	BB.2.29	130	井西義人	御堂計画道路堺磐ヶ寺跡整備
98066	はさみ山道路	藤井寺市野中	免査	BB.2.12	BB.2.24	50	井西義人	御堂西幹線下水管渠整備
98067	新堂寺	富田市藤丘	免査	BB.1.14	BB.3.31	240	井西義人	新宮富田林北寺(第1期)建設
98068	道路外	岬町湖崎3789-7	試験	BB.1.13	BB.1.13	4	新井文弘	大阪市土地開発公社特定建設事務所建設
98069	中之社・宮の後道路	岸和田市蘭川町	試験	BB.11.18	BB.12.3	72	新本・新	主要地方道岸和田中境貝塚線建設
98070	木の本道路	八尾市木の本1丁目	試験	BB.1.13	BB.1.13	30	龜島重則	平野川改修
98071	難原通路	四條畷市難原北1-1	立会	BB.1.31	BB.3.31	1,800	阿部幸一	新立四条畷高等学校校舎(校舎解体)
98072	大和川今治道路	松原市天美西	免査	BB.11.5	BB.3.14	1,430	新瀬 透	今治机理通運設
98073	木の本道路	八尾市木の本1丁目	免査	BB.2.10	BB.3.7	172	藤澤真徳	平野川改修
98074	三井中通路	八尾市田中4丁目	免査	BB.1.8	BB.3.31	680	龜島重則	平野川改修
98075	道路外	大阪市生野区鈴谷	試験	BB.3.25	BB.3.25	8	大室康弘	生野橋学校改築
98076	沢共同墓地	貝塚市沢	試験	BB.2.24	BB.3.7	78	新本 五	大阪施沟埋設設

第3表 平成8年度調査箇所一覧(2)



第2図 発掘調査概要報告掲載遺跡位置図



## 発掘調査概要報告

### 東郷遺跡 (96004)

(1) 八尾市本町 (2) 49m<sup>2</sup>

(3) 平成8年7月22日～10月5日

(4) 主要地方道平野中高安線拡幅

(5) 地村 邦夫

都市計画道路平野中高安線拡幅工事に伴う発掘調査は平成8年度の調査で第10次を数える。今回の調査地点は平成7年度第8調査区の西隣である。調査区は2カ所で、西側調査区を第1調査区、東側調査区を第2調査区とした。

#### 第1調査区

本調査区では遺構面を3面検出した。

第1遺構面は地表下1.5mで検出した。灰オリーブ色(7.5Y5/2)シルト層上面であり、遺構面のレベルはO.P.+8.3mであるが、擾乱のため上面が削られてい可能性がある。本遺構面は擾乱によって、非常に残りが悪かったが、ピット、自然河川を検出した。調査区中央で検出した自然河川の規模は幅8.8m、検出面からの深さ1.2mである。遺物は量的には少なかったが、弥生時代後期～古墳時代前期の土器が出土している。本遺構面の時期は古墳時代前期と考えられる。

第2遺構面は灰色(N6/0)シルト層上面であり、遺構面のレベルはO.P.+8.1mである。溝、土坑を検出したが、遺物はほとんど出土せず、時期は不明である。

第3遺構面は灰色(5Y4/1)粘土層上面である。実際には遺構は全く検出できなかったが、第2調査区第3遺構面に対応すると考えられる。第2調査区の調査結果から、本遺構面の時期は弥生時代に遡る可能性がある。



第3図 調査区位置図

第3遺構面下層は自然河川と見られ、砂と粘土が複雑に堆積している。遺物は小片であるが弥生時代中期の土器片を検出しており、本自然河川の時期は弥生時代中期と考えられる。

#### 第2調査区

本調査区では遺構面を3面確認した。

第1遺構面は地表下1.3mで検出した。黄褐色(10YR5/6)砂質土層上面であり、遺構面のレベルはO.P.+8.5mである。井戸、杭列を検出したが、これらの遺構は擾乱で検出できなかつた近世～近代の遺構面に伴う遺構と考えられる。遺構面は第1調査区第1遺構面に対応するものと考えられることから、古墳時代前期～中期の可能性が高いが、本調査区では当該期の遺構は全く検出できなかつた。

第2遺構面は暗緑灰色(7.5GY4/1)砂層上面であり、遺構面のレベルはO.P.+8.1mである。本遺構面では小規模なピットを検出したが、遺物は全く出土しなかつた。そのため本遺構面の時期は特定できないが、第2遺構面下層から古墳時代前期の土師器片が出土しており、第1遺構面の時期を考えると、古墳時代前期の可能性が高い。

第3遺構面は暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)粘土層上面であり、遺構面のレベルはO.P.+7.6mである。本遺構面では溝を2条検出した。遺物は出土しなかつた。本遺構面の時期は弥生時代に遡る可能性がある。

第3遺構面下層は自然河川と見られ、砂と粘土が複雑に堆積している。弥生時代中期の土器片を検出しており、本自然河川の時期は弥生時代中期と考えられる。

## 野間遺跡（96008）

(1) 豊能郡能勢町野間稻地 (2) 5300m<sup>2</sup>  
(3) 平成8年6月27日～平成9年2月28日  
(4) 東郷地区圃場整備 (5) 辻本 武

当遺跡は大阪湾より30km離れた内陸の盆地平野にあり、標高は200～250mである。当遺跡を含む東郷地区では、これまで6年間にわたり遺跡の発掘調査を実施してきた。

### 縄文時代

当遺跡周辺では、これまで石器や押型土器が採集されており、縄文時代の遺跡の存在が確実視してきた。今回の調査でも縄文式土器や石器、サヌカイト片がかなりまとまって出土した。土器では早期の梢円押型文、前期の北白川下層Ⅰあるいは羽島下層Ⅱ、中期、後期の元住吉山（？）、晚期と各期のものがある。晚期のものが量的に最も多く、滋賀里田の土器棺も一基検出した。石器では石器19点、スクレーパー2点、石匙1点、完形の磨製石斧1点、楔形石器10数点。土器棺以外はすべて中世以降の包含層からの出土で、遺構は土器棺のみであった。

### 古墳時代

6世紀後半～7世紀の竪穴式住居8棟を検出した。うち4棟には作り付けの竈の跡を残す。おそらくすべての住居にあったであろうが、後世に削平されている。各住居から出土した須恵器・土器は一括遺物として貴重なものである。

### 奈良時代

幅18m、深さ1mの大溝中より、8世紀後半～9世紀の土師器・須恵器・製塩土器がまとめて出土した。なかに「□余麻□」と書かれた墨書き土器があった。『続日本紀』延暦四年条に、能勢郡の大領として、「神人（みわのひと）為奈麻呂（いなまろ）」の名が記録されている。関係がある

のかも知れない。

### 中世（13～15世紀）

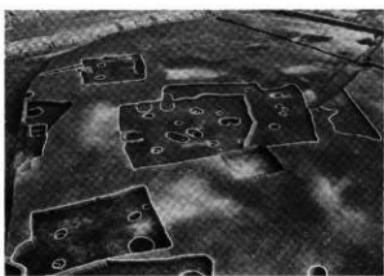
昨年度は、50m四方の規模で、幅10mの堀が囲む屋敷跡の一部を調査した。今年度はこの屋敷跡の続きを調査した。両年度の調査により、屋敷跡のはば8割を発掘することができた。

屋敷はこの付近に所在した京都西山の地蔵院領の荘園「長町庄」に関係するものであることは確実である。

屋敷地内には8棟の掘立柱建物が建ち並ぶが、うち1棟が極めて特異なものである。屋敷内の東端の中央に所在するが、柱の掘り方が2m四方、深さ1m以上で、底の中央に0.5～0.7m大の礎石を据えて、径40cmの柱を立てるものである。このような柱が6本（うち2本が掘り方内にきれいに遺存していた）、他にも径30cmの柱が3本、径20cmのものが5本以上立っていたと考えられる。掘り方内からは瓦器片や丹波焼片が出土しており、中世のものであることは間違いない。中世の掘立柱建物の柱穴で、これはどう大きなものは寡聞にして知らず、特異なものと言わざるを得ない。

屋敷内の中央は建物の痕跡がなく、広場であったと考えられる。

屋敷外からは、その時期と同じと考えられる土壙墓が検出された。刀子と完形の土師器小皿が副葬されていた。



第4図 古墳時代竪穴住居群



第5図 中世屋敷跡の掘立柱建物

## 総持寺遺跡 (96009)

(1) 茨木市三島ヶ丘 (2) 2180m<sup>2</sup>  
(3) 平成8年7月15日～平成9年2月28日  
(4) 府営茨木総持寺住宅建替 (5) 山上 弘

総持寺遺跡は、茨木市の東端に位置し、大阪平野の北に連なる北摂山地から派生した富田台地と呼ばれる段丘上に立地している。

遺跡は、弥生時代から中世にかかる複合遺跡で、最近の調査により方墳で構成された古墳群が新たに見つかり、同じ台地の北1kmに所在する、椎体陵古墳（太田茶臼山古墳）との関連が考えられている。また8～9世紀には掘立柱建物が多数建てられ、隣接する総持寺北遺跡にも拡がっている。北を東西に貫通する西国街道ともあわせて、古代の要衝の一角を占めている。

### 弥生時代

調査区の西南隅で方形周溝墓2基、円形周溝墓1基と土器棺墓2基を検出した。円形周溝墓は、径9mを測り、北側に約1mの方形の張出部がある。周溝の平面形は方形を意識し、幅1～2mを測る。方形周溝墓は一辺7m前後を測り、周溝の幅は、それぞれ1mと2mを測る。

弥生時代後期後半に造られ、土器棺墓は周溝墓よりやや古い。

### 古墳時代

古墳時代中期には、今回の調査区で新たに3基、合わせて38基の古墳跡を検出した。遺構は、墳丘の盛土部分すべてが削平され、築造時に掘られた周溝だけが残存していた。1基の円墳をのぞいてすべて方墳で、その規模は最大15m、最小4mを測り、平均的には10m弱のものが大半を占める。周溝の幅は0.5～2mを測る。

周溝内から、古墳に伴う遺物が転落、埋没した状況で検出される。半数以上の古墳が埴輪を持ち、

円筒埴輪だけでなく形象埴輪も有している。形象埴輪には、家形埴輪（切妻、入母屋）、動物形埴輪（馬、鶴、水鳥）、器材形埴輪（盾）の種類がある。須恵器は、杯・高杯・甕・壺・甕がある。埴輪は無黒斑の窯製品で、一部には、縦体陵古墳の築造を機契として埴輪生産を開始した、新池遺跡から供給されたものも含まれている。

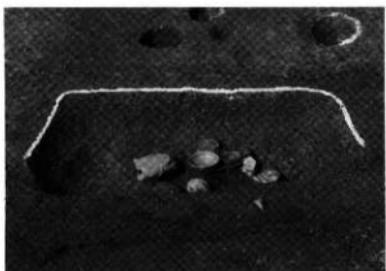
5世紀前半から後半にかけて順次形成された古墳群である。

### 古代

8世紀から9世紀にかけて数時期にわたる建物群と溝を検出した。奈良時代の建物は真北からやや北西に主軸を向け、平安時代の建物は主軸を北東に向ける。井戸は1基検出され、その中から蕭串、曲物等の木製品の他、転用硯、墨書き器が出土した。また特筆すべきは、「調」の字が刻まれた須恵器の破片が出土した。調の字の前後にも文字が刻まれ、いずれかの地で調雜物として朝献用に特に生産された土器であろう。

### 中世

12世紀を中心とする時期の遺構が多数検出された。数千個にも及ぶピットは、何時期かの建物が重複してあったことを示し、東西・南北に走る溝は、建物群を分ける区画溝としての性格を持つ。区画された敷地の一角から土坑墓が2基検出された。そのうちの1基からは土師器の皿1枚、小皿8枚と共に中国同安窯で焼かれた青磁碗が埋められており、屋敷墓の一つと考えられる。井戸は、区画ごとに掘られているのではなく、2～3軒が共同で使用していたと考えられる。



第6図 中世の土坑墓



第7図 「調」刻字土器

## 歌垣第2地区遺跡群 (96010・42・57・58・63)

(1) 豊能郡能勢町倉垣・山内 (2) 2178m<sup>2</sup>

(3) 平成8年6月27日～平成9年3月26日

(4) 府営農村基盤整備歌垣第2地区 (5) 奥 和之

調査は、府営農村基盤整備事業「第2歌垣地区」に併せて実施したものである。歌垣地区は、豊能郡能勢町山内、倉垣、吉野地区などの全域を指す名称で、能勢町の東北部にあたる。

調査は、3ヶ年にわたりて続けられ、今年度は4遺跡の発掘調査及び試掘調査を、倉垣、山内の2地区で実施した。

調査成果の概略は以下の通りである。

### ハイ原遺跡 (485m<sup>2</sup>)

弥生時代前期	土坑	1基
弥生時代中期	住居址	1棟
古墳時代後期	住居址	2棟
平安時代	溝	1本
中世	溝	3本

### 唐竹遺跡 (763m<sup>2</sup>)

古墳時代前期	住居址	1棟
	土坑	4基
	溝	1本
古墳時代後期	溝	1本
飛鳥時代	溝	1本
平安時代	建物	3棟
中世	溝	1本

### 坪ノ内遺跡 (110m<sup>2</sup>)

弥生時代中期	溝	1本
--------	---	----

### 阪尻遺跡 (508m<sup>2</sup>)

古墳時代前期	溝	1本
	しがらみ	1基
古墳時代後期	溝	1本
	しがらみ	1基
中世	土坑	3基



第8図 ハイ原遺跡弥生中期堅穴住居

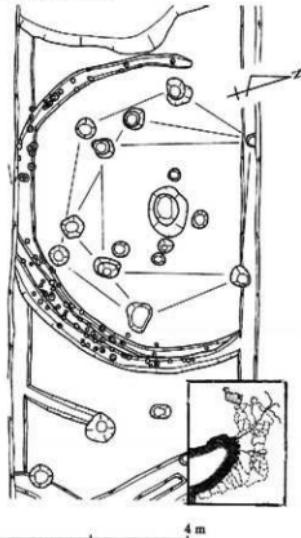
### 柱穴 多数

試掘調査は、倉垣、山内地区の圃場整備事業対象地に78箇所の試掘坑を設定し、実施した。その結果、新規発見2箇所、範囲拡大2箇所の遺跡を新たに発見した。

ハイ原遺跡弥生時代中期の堅穴住居址

D地区で検出した弥生時代中期の住居址で、同一地点において3回の建替を行っている。土層断面および平面観察の結果、規模が拡大しているものと推定される。主柱穴は、重複1が4本、重複2が5本、重複3が6本と、規模が拡大するに従い増加する。住居址の規模は、壁帶溝から重複2が径約6.2m、重複3が径約6.4mを測る。壁帶溝周辺には、壁の施設と考えられる径0.05m前後の木杭と推定されるピットが多数存在する。

住居址の南東側約1.0mには、住居址とほぼ同心円状に延びる溝が存在する。溝が小規模であることと土層断面に盛土の痕跡が認められなかったため、疑問の点が多く残るが、住居と溝の間が周堤帯の可能性がある。



第9図 ハイ原遺跡弥生中期堅穴住居実測図

## 池田西遺跡（96011）

- (1) 寝屋川市池田西町 (2) 1999m<sup>2</sup>  
(3) 平成8年7月17日～平成9年3月24日  
(4) 府営寝屋川池田住宅建替 (5) 佐久間 貴士

池田西遺跡の調査は平成5年度に第1次調査、平成6年度に第2次調査を実施し、平成8年度が第3次調査である。これまで古墳時代と奈良時代の集落址、平安時代から江戸時代の耕地址、江戸時代の粘土取り跡と洪水による砂層などが発見されている。今回は新たに弥生時代畿内第IV様式の堅穴住居址が見つかった。

### 弥生時代

弥生時代の堅穴住居址の発見は寝屋川市では初めてのことと、同時に高柳遺跡でも見つかっている。住居は火災にあっており、大量の建築材が炭化して残っていた。平面プランは楕円形で主柱穴は2本、中央に炉があり、炉脇に大きな石が据えられていた。半分だけ検出された範囲では最大径5.2m、壁高15cmである。周辺の調査区では住居址が確認されておらず、遺物の出土量も少ないことから、2～3棟程度の小規模な集落と推定される。また遺跡の東で、深さ60cmほどの小さな谷が発見され、谷底から直弓や砥石が出土した。この谷は推定幅が約20mある。谷の中央は未掘だが、小川が流れているものと思われる。

### 古墳時代

本遺跡としては初めて掘立柱建物跡が発見された。時期は6世紀で4棟ある。また井戸も3基あり、これまでの調査の分と合わせて5基となった。井戸には3基ともすべてに一部破損しただけの完形に近い土師器や須恵器が入っていた。また滑石製有孔円盤が1個、白玉9個が出土し、うち白玉

7個は須恵器壺に入っていた。

### 奈良時代

掘立柱建物跡2棟、櫛或いは塀と思われる柱列が1条発見された。これまでの調査分とあわせて掘立柱建物跡6棟、柱列が2条になった。第1次調査では「東家」「葛二」（隣接地が葛原）などの墨書き器12点が出土している。

### 平安時代から室町時代

平安時代では耕作に伴う小溝群が二ヵ所で発見され、一部が耕地になったことが判明した。鎌倉時代以後は遺構面が上がるが遺構は少なく、瓦器・土師器・中国陶磁が少量出土した。

### 安土桃山時代から江戸時代

この時期には全体が耕地化されていたようで、遺構面もやや高くなる。江戸時代の後期には、畦畔で囲まれた耕地毎に粘土が取られていた。粘土取り跡はすべての調査区で確認され、かなり広範囲に作業していることが分かった。この地区は粘土取り中に淀川決壊による大洪水に見舞われた。遺跡全体に砂が堆積し、厚さ60cmに達するところもあった。この砂層と直下の粘土層からは後期の遺物が出土することから、享和2年（1803）の点野切（しめのぎれ）によるものと思われる。この時池田の隣村の点野で堤防が106間（190m）切れ、さらに下流の仁和寺（にわじ）でも大きく切れている。調査地点は、現堤防から約100m離れているが、周辺の調査から数百m四方に砂が堆積したものと考えられる。



第10図 弥生時代の焼失堅穴住居



第11図 古墳時代～平安時代初めの遺構群

## 木の本遺跡（96013）

(1) 八尾市空港1丁目 (2) 192m<sup>2</sup>  
(3) 平成8年7月1日～10月4日  
(4) 平野川改修 (5) 藤澤 真依

木の本遺跡は大阪府の東南部八尾市に位置する古墳時代を中心とする弥生時代～中世の集落跡である。調査地は八尾市空港1丁目で第2・6・8次で調査を行った空港北濠と並行した平野川部分である。

### 層序

調査区は最大幅3.0m、延長64m、面積は192平方メートルである。調査の結果確認した土層は12層で、以下の通りである。

第1層 黒色ヘドロ・盛土であり、層厚は約1mである。

第2層 青灰色粘土（10B G6/1）であり、層厚は0.2mである。上面の標高はT.P.+9.4mである。遺物は出土しなかった。

第3層 灰色粘土（N6/）であり、層厚は0.2mである。上面の標高はT.P.+9.2mである。遺物は出土しなかった。

第4層 灰色粘土（N4/）であり、層厚は0.1mである。上面の標高はT.P.+9.0mである。遺物は出土しなかった。

第5層 灰白色砂（2.5G Y8/1）であり、層厚は0.05mである。上面の標高はT.P.+8.9mで、調査区西1/4に薄く堆積しているだけである。遺物は出土しなかった。

第6層 暗緑灰色粘土（5G4/1）であり、層厚は0.1mである。上面の標高はT.P.+8.9mである。遺物は土師器小破片が少量出土した。

第7層 赤灰色粘土（10R5/1）であり、層厚は0.2mである。上面の標高はT.P.+8.8mを測る。遺物は多量の布留式土器と数点の須恵器破片を土しただけである。その他には縄文時代晚期の突帯文土器片が少量出土した。

第8層 灰色粘土（N6/）であり、層厚は0.1mである。上面の標高はT.P.+8.6mである。遺物は古墳時代前期の土師器が出土した。

第9層 暗灰色粘土（N3/）であり、層厚は0.1mである。上面の標高はT.P.+8.5mである。遺物は弥生時代後期の壺・壺が出土した。

第10層 黒色粘土（N2/）であり、層厚は0.05mである。上面の標高はT.P.+8.45mである。遺物は縄文時代晚期の深鉢が出土した。

第11層 緑灰色粘土（5G6/1：暗灰色粘土

（N3/）ブロック混じり）であり、層厚は0.15mである。上面の標高はT.P.+8.4mを測る。遺物は縄文時代晚期の突帯文土器の破片が少量出土した。

第12層 緑灰色シルト（5G6/1）である。上面の標高はT.P.+8.25mである。遺物は出土しなかった。

### 遺構と遺物

調査は第5層上面を除いた10面で行ったが、遺構は第5・6・7・8・9面で検出した。

第5面は第7層の赤灰色粘土（10R5/1）上面である。調査区西端で東西方向に伸びる溝を検出した。幅0.4m、長さ約6m、深度0.1m、埋土は第6層暗緑灰色粘土（5G4/1）である。遺物は出土しなかった。

第6面は第8層灰色粘土（N6/）上面である。中央部分で東西約6m、南北3m以上、深度0.2mの土器溜を検出した。古墳時代の土師器が多量に重なって出土したが、器種は高杯と小形丸底壺が多く壺や壺は少ない。土器に混じって滑石製の首飾りが出土した。長さ1.5cmの勾玉1点、長さ0.9cmの勾玉3点、管玉3点、白玉120余点がまとまって出土した。

第7面は第9層暗灰色土（N3/）上面である。西端で直径0.3～0.5m、深度0.1～0.3mのビット3基を検出した。埋土は灰色粘土で遺物は出土しなかった。

第8面は第10層黒色粘土（N2/）の上面である。第6面で検出した。土器溜の下で弥生時代後期の壺・壺等が出土した。壺は第6面の土器溜で上半分が削り取られているが、壺は壊れずに残っていた。明確な掘り込み等はなく、遺構と言えるかどうか不明であるが、土器の出土状況からは弥生時代後期から古墳時代前期まで同様の利用を考えられる可能性もある。

第9面は緑灰色粘土（5G6/1）上面である。中央部で幅0.5m深度0.15m長さ約3.5mの溝を検出した。埋土は黒色粘土で、遺物は出土しなかった。

## 北島遺跡（96014）・北島池遺跡（96033）

（1）東大阪市中石切7丁目 （2）150m<sup>2</sup>

（3）平成8年10月1日～平成8年11月30日

（4）寝屋川南部流域下水道事業下水管渠築造

（5）阿部 幸一

### 北島遺跡

遺跡は、生駒山地の扇状地末端部から河内平野にかけての低湿地に立地している。

調査地は、植附ポンプ場から国道170号線下に下水管（寝屋川南部流域下水道事業枚岡河内南幹線）をシールド工法で建設するための発進坑部分である。

調査面積は、約40m<sup>2</sup>である。

調査地は大和川の付け替え以降に掘揚田が開発されていた所である。1991年に下水道ポンプ（植附ポンプ場）建設が計画され、工事に先立つ試掘調査によっての遺跡の存在が確認された。発掘調査では弥生時代からの中世頃までの各時代の水田、掘揚田が検出されている。

調査では調査地が沼地になっていた頃の用水路の肩部に打ち込まれた杭列、奈良時代以前の浅い自然流路等を検出した。しかし、調査面積が狭く、他の遺構は検出できなかった。

### 北島池遺跡

遺跡は生駒山地西麓の複合扇状地末端部から沖積平野にかけて立地している。

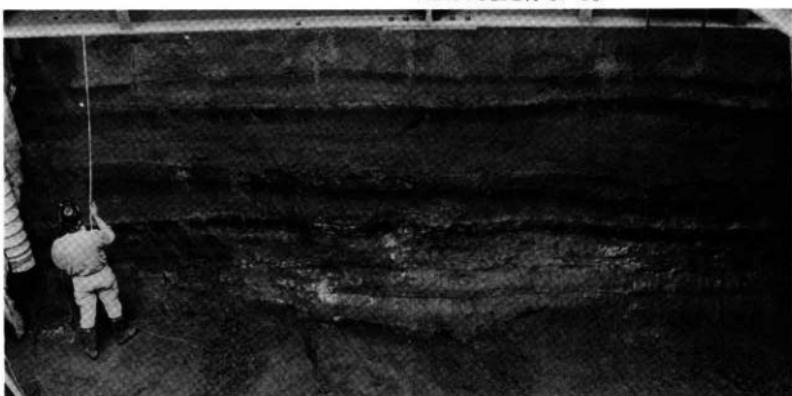
国道170号線の下に公共下水（寝屋川南部流域下水道事業枚岡河内南幹線）をシールド工法で建設するための発進立坑部分で発掘調査を実施した。

調査面積は約110m<sup>2</sup>である。

調査地は、大阪府営水道枚岡ポンプ場の南東隅である。昭和39年に当遺跡で初めて発掘調査が実施され、弥生時代後期から古墳時代の遺構・遺物が検出された地点北西隅からは南東方向に約300m離れている。

今回の調査で遺構は検出されなかった。遺物は調査地の東方生駒山地の平坦部に立地する繩手遺跡から洪水等により流されてきたと見られる繩紋時代後期頃の土器の細片や古代から中世頃の瓦器、土器類須恵器の小片が出土している。

工事は地表（T.P.約7m）下9m近くまで掘削する予定であったことから、T.P.5mからT.P.-2mまでの土層断面図を作成した。T.P.-1m付近の層は、調査地が河内湾の汀線であった時期の堆積層で、2枚貝の貝殻が大量に混入している。<sup>14</sup>Cによる年代測定で、5,910±120B.P.の値を得ている。この上に堆積する粘土層（T.P.-50cm）は海成層か否か不明であるが、4,940±77B.P.の値を得ている。



第12図 北島池遺跡の土層断面

## 陶邑窯跡群 (96017)

- (1) 和泉市鍛冶屋町・蒲田町 (2) 45m<sup>2</sup>  
(3) 平成8年7月1日～7月3日 (4) 旧大阪府農林技術センター柑橘母樹園跡地整備 (5) 大來 康弘

この調査は、旧大阪府農林技術センター柑橘母樹園跡地整備事業に伴う試掘調査である。

調査地は和泉市鍛冶屋町及び蒲田町に所在し、横尾川が開削した、丘陵の東側斜面に位置する。陶邑窯跡群のうち南西部の谷山池（TN）地区にある。

和泉市教育委員会の分布調査等の成果から、事業地内には2基ないし3基の須恵器窯跡がマークされている。

調査対象地は、旧大阪府農林技術センター柑橘母樹園跡地を隣接する住宅都市整備公団のトリヴェール和泉と一体に造成を行うもので、用地のほとんどを削平する計画のため、調査地一帯に試掘坑を設定し、調査を行った。

調査地北西側は、丘陵の東向き斜面で、須恵器窯跡がマークされている。人力による坪掘り（トレンチ1～6）と機械力による筋掘り（トレンチ13・14）で、主に灰原の確認を行った。この内、第2トレンチでサスカ混じりの窯壁片や須恵器が若干出土した。第13トレンチでは、表土の下層、黄灰色土は炭、焼土を多く含む堆積土で、融着や焼歪みのある須恵器壺・壺片が多量に出土した。ま



第13図 調査地位置図

た、第14トレンチでは、表土の下層、淡黄灰色土から須恵器が若干出土した。地山直上には薄い灰層の堆積がみられた。

調査地南西側は、北西部よりやや急な傾斜である。こちらにも須恵器窯跡がマークされており、人力による坪掘り（トレンチ7～10）と機械力による筋掘り（トレンチ11・12）で、灰原の確認を行った。しかし、いずれのトレンチも表土の直下は地山であった。遺物もまったく出土せず、窯跡の存在を確認するにはいたらなかった。

調査地東半は、ゆるやかな傾斜を持つ扇状地形である。機械力による筋掘り（トレンチ15～17）を設定した。表土以下は、丘陵側からの流入堆積層がほぼ水平に堆積しているが、遺構・遺物はまったく検出されなかった。

今回の試掘調査では、須恵器窯体の確認にはいたらなかったが、以上の成果から、事業地の北西付近に須恵器窯跡が存在するものと思われる。出土遺物から、六世紀後半の窯であろう。



第14図 トレンチ配置図

## 寺川遺跡 (96020)

(1) 大東市寺川5丁目 (2) 440m<sup>2</sup>

(3) 平成8年7月22日～10月5日

(4) 主要地方道大阪生駒線拡幅

(5) 地村 邦夫

今回の調査では遺構面を5面確認した。

第1遺構面では水田を検出した。畦畔は確認できなかったが、多数の鋤溝と杭列を検出した。鋤溝の方向は、ほぼ方位に合致している。調査区中央部は削平を受けており、全く鋤溝は検出できなかった。遺構の確認できなかった範囲の外縁部に土止めの杭列を検出したことから、この部分にも水田が造られていたと考えられる。また調査区北端部は約1.5m落ち込む。ここでも多数の土止めの杭列を検出したことから、丘陵斜面に造成された水田の段であることが判明した。第1遺構面直上および遺構から出土した遺物はいずれも小片であった。古墳時代後期の土師器、須恵器が最も多いが、これらは第3遺構面の奈良時代自然河川の遺物が耕作等によって混じったものと考えられる。少量ではあるが陶磁器片が含まれており、本遺構面の時期は近世以降の可能性が高い。

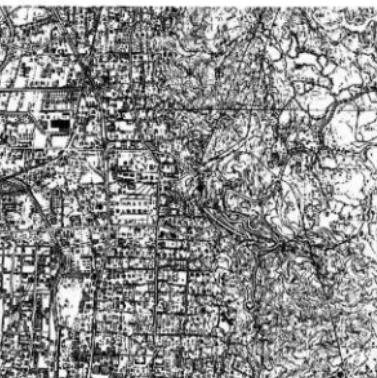
第2遺構面は溝、土坑等を検出したが、鋤溝等、耕作にかかるとされる遺構は検出できなかった。遺物は少なく、時期は第3遺構面の年代である奈良時代から第1遺構面の年代である近世の間としか限定できない。今回の調査結果から、調査区周辺の丘陵上に水田が開発された時期は近世以前には遡らないと考えられる。

第3遺構面では奈良時代の自然河川を検出した。本自然河川からは弥生時代後期～奈良時代までの遺物が多量に出土した。これらの遺物は丘陵上の集落・古墳群から流されたものである可能性が高い。本調査区の近辺では既往の調査で奈良時代の掘立柱建物が検出されているが、当該期の状況はまだ十分明らかになっていない。奈良時代の遺物は量的には極めて少なく、大半が古墳時代後期の遺物である。遺物量からすれば、現在のところ確認されていない古墳時代の集落の存在が推測される。また本自然河川からは滑石製子持勾玉、翡翠製勾玉のほか有孔円盤、製塙土器、多量の獸骨が出土した。獸骨の中にはト骨と考えられる刻みの入ったものが1点含まれている。これらの遺物は調査区付近で何らかの祭祀が行われたことを示すものと考えられるが、時期やそれぞれの遺物の関係も含めて不明な点が多い。

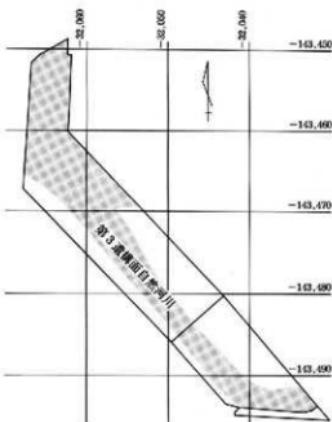
第4・5遺構面は古墳時代後期の可能性が高い

が、遺構の密度は非常に薄く当該期の状況は明確ではなかった。少量の土器片が出土したが、遺存状態は非常に悪い。

第5遺構面下層は、砂疊とシルト・粘土の互層となっている。G.L.-1.5mまで調査したが、遺構・遺物とも確認できなかった。



第15図 調査地位置図



第16図 調査区全体図 (S=1/600)

## 古市大溝（96026・52）

- (1) 羽曳野市野々上5丁目 (2) 844m<sup>2</sup>  
(3) 平成8年7月30日～8月5日、12月2日～平成9年1月29日  
(4) 府営羽曳野住宅建替 (5) 林 日佐子

古市大溝は、前の山古墳（白鳥陵古墳）を経て北西に向った後、北方向に屈曲し、岡ミサンザイ古墳（「仲哀天皇陵」）南東部で枝分かれして西に延びる、幅10m、深さ5m、全長15kmの南河内を縱断する古代の大水路である（第17図）。

今回、府営羽曳野住宅建て替え建設工事に伴う住宅北側斜面の擁壁工事に先立って、発掘調査を実施した。

調査地点は岡ミサンザイ古墳の南200mに位置し、前方部東西辺に平行して延びる古市大溝の南肩部にあたる。1次調査の成果を受けて、2次調査では南北16m、東西50m（面積800m<sup>2</sup>）の調査区を設定した。

現地表面下、約0.2～1.2mに堆積する厚さ約20～60cmの黄褐色粘質土（第7層）は、7世紀前半の土師器を中心とする包含層で、この時期以降の遺物は含まない。第7層直下に厚さ20～40cmの暗褐色混じりの黄褐色粘質土（第8層）が検出され、この面が古市大溝の開削面となっている。古市大溝は羽曳野丘陵先端の標高約41mの上位段丘を、等高線に直交して東西方向に開削されたことになる。なお、肩部南側から堤状構造は検出されなかった（第19図）。また、古市大溝の規模については、

現地形が当時の形状を残しており、調査区北側の底部とみられる地点で標高約36.5mを測り、南肩部との高低差から、溝の深さは4.5m程度といえる。溝埋土からは旧石器、円筒埴輪、須恵器等が出土した。古市大溝の掘削は開削面を覆う第7層の年代から7世紀前半をやや遅る時期と考えるのが妥当であろう。

調査区の南200mに位置する野中寺は7世紀中頃の創建で、渡米系氏族「船氏」の氏寺と推定されている。また、この東側一帯にひろがる野々上遺跡では7世紀前半には大形の掘立柱建物が検出されおり、彼らの居住地とみられている。古市大溝という大規模かつ高度な土木工事の遂行には、安定した国家体制を基盤に、水運に秀でた「船氏」が大きな役割を果たしたと考えられる。



第18図 調査地位置図



第17図 明治10年代周辺地形図（網部・古市大溝推定渉路）



第19図 古市大溝全景

## 秦廃寺・麻生中下代遺跡 (96038)

- (1) 貝塚市半田 (2) 5400m<sup>2</sup>  
(3) 平成8年8月7日～平成9年3月25日  
(4) 府営半田住宅建替 (5) 森屋 直樹

秦廃寺は、貝塚市と岸和田市の市境を流れる津田川の左岸、中位段丘状に位置する。古代の南海道沿いにあり、東側には半田の一里塚が所在する。今回の調査区は推定寺域の南側にあたり、南海道から秦寺にむかう道路跡を検出した。さらに、その両側に、7世紀前半の堅穴住居址群と、7世紀後半から8世紀の掘立柱建物群を検出した。遺構は大きく3時期に分けることができる。

### 遺構

#### 1期（6世紀後半～末）

第1調査区で不定形の土坑や溝を検出した。出土遺物の中には、窯変した須恵器が多く出土した。これらは、本遺跡の東に所在する海岸寺山窯跡群との関連が考えられる。

#### 2期（7世紀前半～中葉）

第1・2調査区で9棟の堅穴住居跡、溝、土坑等を検出した。堅穴住居跡はすべて平面が方形で壁面に竈を持つものが多く、大阪府の南部では最も新しい時期に属するものである。また、第2調査区で検出した構からは、豊浦寺式軒丸瓦が出土した。

#### 3期（7世紀後半～8世紀前半）

第1調査区南側、第2調査区東側で掘立柱建物跡を検出した。掘立柱建物はその切りあいから、3時期の建て替えが考えられる。いずれの建物も2間×3間を基本としているようで、それぞれの建

物間に規模的な差異は認められない。

### 遺物

出土した軒瓦は軒丸瓦が三形式6種類、軒平瓦は二形式3種類である。

#### ・素弁八葉蓮華文軒丸瓦（豊浦寺式）

2種類の範が存在する。一つは飛鳥豊浦寺のもの、もう一つは和泉小松里庵寺と同範と思われる。

#### ・複弁六葉蓮華文軒丸瓦（紀寺式）

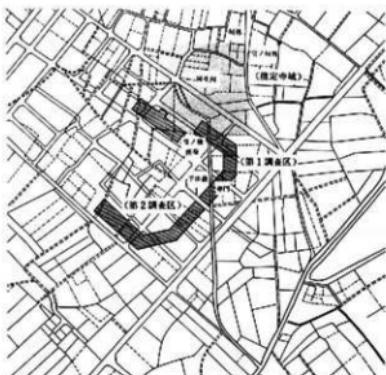
周縁に雷文帯がめぐり、間弁が1カ所省略される。出土のものは全て同一範である。重弧文軒平瓦がセットになると思われる。

#### ・単弁八葉蓮華文軒丸瓦（池田寺式）

周縁に唐草文帯がめぐる和泉池田寺2類と同系のもので、3種類の範が存在する。均整唐草文軒平瓦とセットになる。

### 集落

堅穴住居跡を主体とする集落は、豊浦寺式軒丸瓦の時期にあたり、掘立柱建物で構成される集落は、紀寺式軒瓦から池田寺式軒瓦に併行する時期と考えられる。また、桶巻き作りの平瓦を分割せずに、竈として転用しているものが2点出土している。これらのことから、寺域に南面する集落は、秦寺の造営集団の集落が考えられる。



第20図 調査区配置図



第21図 秦廃寺出土軒瓦拓影図

## 水間二ノ戸遺跡 (96039)

- (1) 貝塚市水間字二ノ戸 (2) 187m<sup>2</sup>  
(3) 平成9年3月10日～3月12日 (4) 水間郵便局建設 (5) 服部 文章

調査地点は、貝塚市水間字二ノ戸251-2, 252-1, 253-2に当たる。開発面積は810m<sup>2</sup>である。

本遺跡は、貝塚市教育委員会による試掘調査によって新たに発見周知された遺跡である。市教育委員会による試掘調査では、現地表下約0.5mの盛土直下で須恵器、土師器、瓦器等を含む旧耕土、床土、褐色砂質土層が確認された。また、現地表下約0.9m付近の地山上面で溝、土坑等の遺構が検出され、当該地が水間寺前面に当たることから、周辺に門前或いは参道沿いの集落が展開する可能性が指摘された。しかし全体の状況を十分把握するには至らなかった。これを受け調査の実施に向け、本府教育委員会による試掘調査を再度実施した。その結果、遺構密度はさほど高くないものの工事予定区全域に亘る遺構面、遺物包含層が依存する可能性が高いことが確認された。しかし遺構密度や遺物の出土状況から見て、集落遺跡の中心部ではなく縁辺部に当たる可能性が高いものと判断された。

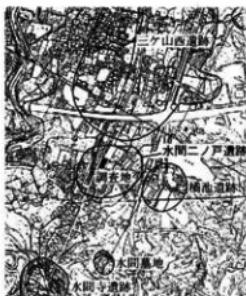
上記試掘調査結果に基づき近畿郵政局と再度協議を行い、埋蔵文化財の損壊を最小限に止めるよう協力を求めるとともに、地中基礎部分15ヶ所及び浄化槽部分について調査を実施することとなつた。調査は基礎掘削部分を調査グリッドとして実施し、調査面積は試掘部分を含めて187m<sup>2</sup>である。なお浄化槽部分については平成9年度となる予定である。

各調査グリッドとも現地表下約0.5mが盛土、その直下に層厚それぞれ約10～15cmの旧耕土、床

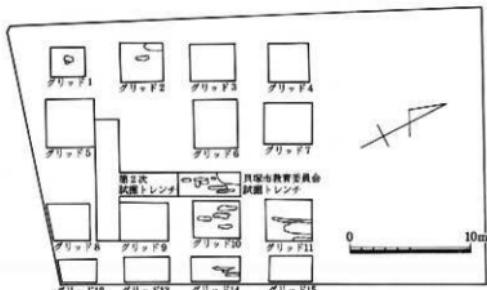
土を介し、ほぼ水平に堆積する層厚約20cmの褐色砂質土に至る。この褐色砂質土からは瓦器、土師器、須恵器の小片が出土しており、中世包含層と判断された。その下位は遺物をまったく包含しない明黄褐色粘質土、暗茶褐色土等となり、地山層と判断された。以下、各グリッドの状況を述べる。

グリッド1では、地山上面で瓦器小片を出土する浅いビット2ヶ所が検出された。グリッド2では、地山上面で鋤溝状の落ち込み2ヶ所が検出され、土師器、瓦器片数点が出土した。グリッド3～6は、遺構、遺物の出土は皆無であった。グリッド7では包含層内より須恵器片1点が出土している。グリッド8及び12は、攪乱が著しく遺構、遺物は確認されなかつた。グリッド9・10・13では、地山上面で鋤溝が検出された他、土師器、須恵器片が出土した。グリッド11・14・15では、包含層内より須恵器、土師器、瓦器片の出土が認められたが遺構は検出されなかつた。

今回の調査では、新たに発見された本遺跡の性格を明確にするには至らなかつたが、南に位置する水間寺の成立とともに周辺の中世社会を検討する一資料を得たと言える。



第22図 調査位置図



第23図 トレンチ配置図

## 高月寺跡（96040）

- (1) 忠岡町高月南184-2他 (2) 92m<sup>2</sup>  
(3) 平成8年9月13日～9月24日  
(4) 倉庫建設 (5) 服部 文章

民間による倉庫建設に伴う試掘調査である。調査地点は、泉北都忠岡町高月南184-2, 169-2, 169-1, 186-4, 170-5に当たる。開発面積は3133m<sup>2</sup>である。

調査は、当該地点が周辺の既往調査結果から旧河道に当たる可能性が想定されたため、開発予定地内6ヶ所に1m×2m程度の試掘グリッドを設定して実施したが、当初想定された旧河道状の土層は全面に及ばないことが確認された。このため開発予定地全体の土層堆積状況と遺構・遺物包含層の有無を確認するため、当該地を南北に縦断するように幅2m、延長約40mのトレーナーを設定し、重機で掘削した後、土層断面の精査及び遺構検出を試みた。試掘による調査面積は92m<sup>2</sup>である。

グリッド調査では、開発予定地の北東部に設定したグリッドNo.1で現地表下約80cmの盛土層直下で旧河道堆積物とみられる砂礫層が検出された。しかし他の5ヶ所のグリッドでは盛土下に暗灰色粘質土層、明黄褐色粘土層が認められ、旧河道は当該敷地の一部に当たるのみで当該地全域に及ぶものでないことが確認された。これらの層位は遺物包含層の可能性が認められたため、さらにトレーナー調査による確認が必要と判断された。

グリッド調査の結果を受け、開発予定地のほぼ中央に南北方向の幅2m×40mのトレーナーを設定した。その結果、現地表下80cmから1m付近で暗灰色粘質土層が検出され、13世紀代の所産と判断される瓦器片・土器器片の出土が認められた。これらの層位は、調査区の数ヶ所で産業廃棄物等の投棄により部分的に搅乱を受けているものの全面にわたっては水平に堆積する状況が確認された。暗灰色粘質土層下は、比較的堅緻な明黄褐色粘土層で遺物の包含も認められず地山層と判断された。

調査区が狭小なため詳細に遺構面の精査は行なえなかったが、明黄褐色粘土層上面では13世紀代を中心とする遺構が良好に遺存する可能性は極めて高いものと判断された。

これまで高月寺跡では開発計画に伴い数次にわたり試掘調査が実施されているが、いずれも旧河道またはその氾濫原に当たり、遺構や遺物包含層は確認されていない。しかし今回の調査では、ほぼ水平に堆積する遺物包含層が確認され、13世紀

代を中心とする遺物が検出された。こうした状況は、実体に不明な点を多く残す本遺跡において当該地周辺に中世遺構面が良好に遺存する可能性が極めて高いことを示しており、今回の調査の大きな成果の一つと言える。

倉庫の建設にかかる開発計画については、地中梁および基礎構造物を盛土内に納めるよう事業者に協力を求め、遺物包含層が損壊されないように施工する事としその現状保存に務めた。



第24図 調査位置図

## 池上曾根遺跡（96043）

- (1) 和泉市池上町 (2) 5142m<sup>2</sup>  
(3) 平成8年8月17日～平成9年3月25日  
(4) 府道池上下宮線建設 (5) 西川 寿勝

発掘調査は国道26号線の東に取りつく府道池上下宮線建設工事に伴うものである。池上下宮線は先に調査が行なわれた史跡指定地内の府道松ノ浜曾根線建設工事の東に延長した部分である。

今回調査は用地買収の済んだ5か所についてそれぞれ東から1～5区を設定して行なった。調査面積は(1区692m<sup>2</sup>) (2区429m<sup>2</sup>) (3区846m<sup>2</sup>) (4区872m<sup>2</sup>) (5区2303m<sup>2</sup>) 合計5142m<sup>2</sup>に及ぶ。

主な遺構を以下に示す。周溝状遺構が1・2区から3基以上発見された。主体部などは遺存していないかった。1区の周溝1-1西側溝内からは弥生時代中期後半の壺を合わせ口とした土器棺墓が伴った。また、周溝1-2北側溝内には河内地域から搬入された壺を合わせ口にした土器棺墓が発見された。いずれの土器棺墓も周溝埋没後に切り込まれた状況を示さず、溝内に顕著な振り方も発見されていない。

2～5区からは自然河川が発見されている。河川は何度も流れを変え、重なりも見られる。埋土中からは弥生土器のほかに古墳時代前期・同後期・奈良時代前期・平安時代後期の遺物が発見されている。これらの遺物中にはイイダコ壺や土鉢など漁撈の道具が含まれ、集落の性格が伺える。

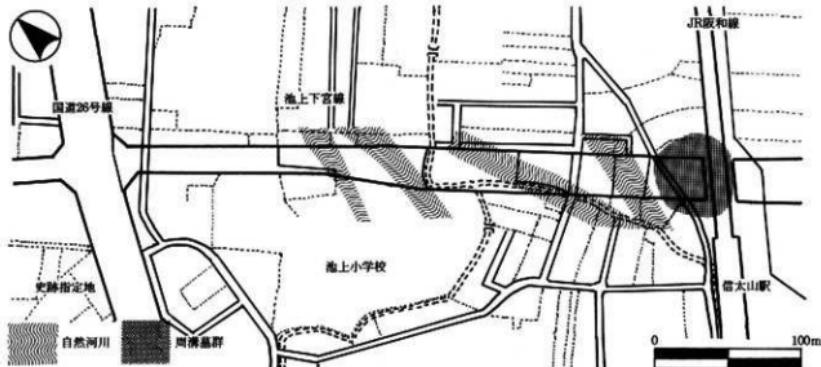
自然河川埋土の上面は現在の条里区画にそった水田整地土となる。整地土中には少量の瓦器片が含まれ、条里区画が整う時期は鎌倉時代前後まで

降ることが予想される。

今回調査では弥生時代中期の新たな墓域が発見され、池上弥生集落の生活領域が史跡指定地以外にも広範囲に及ぶことが解明された。また、弥生時代以降は鎌倉時代まで河川を制御できず、大規模な水田開発が及ばなかったことがわかった。更に古墳時代後期や奈良時代前期など、洪水層発見の遺物は付近には未確認の集落が点在したこと示唆する資料とおもわれる。



第25図 5区自然河川出土土器



第26図 池上曾根遺跡自然河川・周溝墓群分布図

## 陶器南遺跡（96044）

- (1) 堺市陶器北 (2) 1435m<sup>2</sup>  
(3) 平成8年12月2日～平成9年3月14日  
(4) 陶器北地区府営圃場整備 (5) 山田 隆一

陶器南遺跡は、段丘高位面の泉州北丘陵北端部に立地し、南には陶邑窯跡群が展開する。今回の調査は、第1～4調査区に別けて実施した。

### 第1調査区

遺構は希薄で少數の柱穴、溝、土坑、落込みを検出した。

### 第2調査区

遺構は希薄で柱穴、櫛列、溝、土坑を検出した。土坑201は、12～13世紀の東播系大型瓦質壺を埋置したものである。

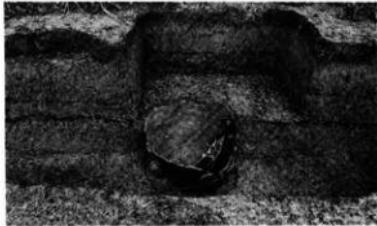
### 第3調査区

遺構は掘立柱建物2棟、土坑4基、溝4条、櫛列3条、多数の柱穴を検出した。掘立柱建物301は、土坑を付設した特異な建物（第29図）である。

この建物には櫛列、祭祀土坑も認められる。掘立柱建物302も溝301、櫛列302と土坑303と一緒に遺構である。両者は12～13世紀を中心とする、有力者の居館の一部と考えられる。



第27図 調査位置図



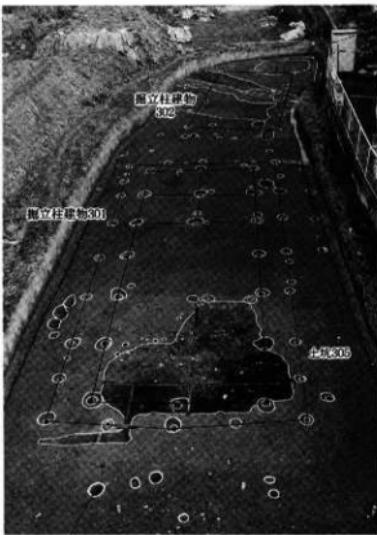
第28図 第2調査区土坑201

掘立柱建物301は、桁行6間（12.74m）×梁行2間（4.24m）の南北棟で、4面に庇柱穴が巡る。それを入れると規模は14.13×6.07mになる。主軸は真南北方向を示す。

土坑305は、掘立柱建物の身舎南部の2×2間の範囲で検出した土坑で、建物外に煙道を付設する。埋土は、上層は粘土ブロックや焼土塊を含む人為の埋立土。中層は焼土塊、下層は灰である。①床面全面に灰層が広がり、埋土中には多量の焼土、焼土塊を含むこと、②床面の一部が被熱赤変すること、③煙道と考えられる施設を有していること、④土器焼成窯、金属や炭等に関する炉や窯とする状況がないことから、カマドを設置した空間、掘立柱建物301を「釜屋」と推定している。

### 第4調査区

遺構は掘立柱建物1棟、櫛列1条の他、多くの鋪溝、溝、柱穴、および若干の落込み、土坑、井戸を検出した。遺物量も多いことから、本来遺構密度の高い範囲である。掘立柱建物と櫛列は平安時代後期のものである。



第29図 第3調査区掘立柱建物

## 岸和田城跡 (96045)

- (1) 岸和田市岸城町 (2) 24m<sup>2</sup>  
(3) 平成8年11月11日～平成8年11月13日  
(4) 一般府道堺阪南線電線共同溝建設 (5) 山田 隆一

岸和田城は中・低位段丘の先端に築造されており、北部を紀州街道が走っている。今回調査は電線共同溝掘削に際し、それと並行して遺構・遺物の有無を確認した調査である。調査は第1～5区に別けて実施した。

### 第1区

盛土を除去すると、GL-1.6mで湧水が著しい小疊、円疊層になる。外濠の堆積土と考えられる。遺物なし（写真右の上）。

### 第2区

盛土を除去すると、GL-1.1mで湧水が著しい砂、小疊、礫混じりのヘドロ層になる。外濠の堆積土と考えられ、加工木、陶磁器、瓦を含む。GL-1.7mまで確認したが、それ以上の掘削は不能。

### 第3区

現地は二の丸を画する濠の前面である。盛土を除去すると、GL-1.5mで湧水が著しい砂、粗砂、小疊混じりのヘドロ状の弱粘土層で、濠内の堆積

土である。若干の加工木が出土した。

### 第4区

現地は二の丸を画する濠の前面である。盛土を除去すると、GL-1.1～1.9mで湧水が著しい暗灰褐色粘質土、その下は緑灰色粘土になる。前者は濠内の堆積土であり、多量の瓦、陶磁器、木器の他、若干の金属器が出土した。後者は無遺物のベースであり、城の方向に急激に落ちていることから、この調査区が濠の外端部に近いと考えられる（写真右の下）。

### 第5区

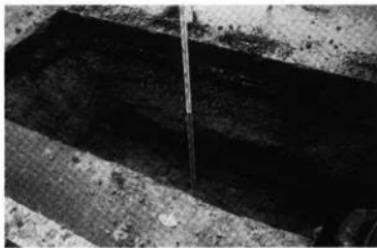
盛土を除去すると、GL-1.4mで灰色砂混じり粘質土を確認した。しかし、この調査区はすでに污水管が埋設されて搅乱を受けており、掘削しなかった。



第30図 調査地位置図



第31図 作業風景



第32図 第1調査区



第33 第4調査区（左が濠側）

## 高柳遺跡（96048）

（1）寝屋川市高柳4丁目 （2）2100m<sup>2</sup>

（3）平成8年11月20日～平成9年3月31日

（4）都市計画道路千里丘寝屋川線建設 （5）杉本 清美

寝屋川市の西側に位置する高柳遺跡は、淀川と古川などの分流が形成した標高約3mの三角洲・自然堤防上に立地している。今回は都市計画道路千里丘寝屋川線建設に伴い約2100m<sup>2</sup>の調査を行った。

今回の調査で中世の耕作跡・建物跡・平安時代の建物跡を検出したほか、調査区北部から弥生時代後期の堅穴住居が見つかった。また、調査区南東部から古墳時代・弥生時代の遺物を含む自然流路を検出した。主な遺物として、土師質羽釜、黒色土器碗、綠釉陶器片、須恵器壺蓋、高杯、甕、弥生土器甕、高杯、石製有孔円盤、漆器椀、錢貨などを見られた。

寝屋川市教委が平成元年～2年に府営高柳住宅の建設に伴う発掘調査で検出した建物群に関連すると思われる建物跡を調査区東部で検出した。柱穴の1辺60×50cm、深さ約40～50cmを測る2間×2間の建物、径60cm、深さ約60cmを測る2間×3間以上の東西に長い建物などがある。柱穴内には、直径20～30cm、残存長約40～60cm程度の柱根が4本残存していた。柱穴内から出土した黒色土器碗などから、これらの建物はおおむね9～10世紀のものと考えられる。

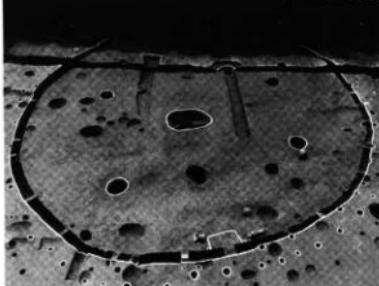
調査区北部の微高地で弥生時代後期の土器（甕・長頸壺の口部・高杯など）を伴う堅穴住居を検出した。直径約7.5mを測る円形の堅穴住居（約44m<sup>2</sup>）で、床面上には火災などで燃え落ちたと思われる屋根を構成する垂木材、壁板材、屋根材などが中央部から放射状に広がり堆積していた。

炭化材を取り除いた床面から柱穴、炉などを検出した。主柱は4本で、いずれも直径約35～40cm、深さ約60cmを測り、柱穴の下部には直径約20～30cmの柱根が残存していた。また、柱の下端を二股に作り出し、直径約10cm、長さ40cm程の横木にまたがせているのが確認できた。住居の北東部に出入口と思われる85cm×40cm、高さ約10cmの段が見られた。主柱の柱間は北側の東西間が3.55m、南側の東西間が3.15m、東側の南北間が2.85m、西側の南北間が3.15mとやや変形の方形を示す。住居のはば中央部には長辺1.3m、短辺0.7m、深さ約20cmの楕円形を呈す炉をもつ。炉内は炭層と灰層が相互に堆積していた。床面の周囲には約15cm幅、深さ約20cmの壁溝が巡る。壁溝内には炭化した厚さ約3～5cm、幅15～20cm程の縦板材が並んでいるのが確認された。住居内と周堤を隔する壁板材（化粧板）と考えられる。壁溝の外側に周堤は確認できなかったが、壁溝から約40cm外側に等間隔で多数の柱穴が見られた。住居の構造を考えるうえでの資料になると思われる。

調査の成果として、中世の耕作面の広がりが確認できた。また、平安時代の建物跡は地方豪族の居宅もしくは地方官衙に関連すると考えられることから、高柳遺跡周辺にある茨田郡衙、高柳廢寺とのかかわりを解明するうえで有力な資料になるだろう。これまで奈良時代以前の遺構は確認されていなかったが、初期須恵器を伴う遺構や、弥生時代後期の堅穴住居が見つかったことから、さらなる遺構の広がりが予想される。



第34図 弥生時代後期焼失住居炭化材検出状況



第35図 弥生時代後期焼失住居

## 岸和田城跡（96049）

(1) 岸和田市岸城町10-1 (2) 2000m<sup>2</sup>

(3) 平成8年11月6日～平成9年3月25日

(4) 府立岸和田高等学校校舎建替 (5) 小浜 成

当遺跡は、岸和田市岸城町10-1に所在し、標高約7mの洪積段丘上に位置している。府立岸和田高等学校の校舎建て替えにともない、1996年11月から1997年3月にかけて約2,000m<sup>2</sup>の調査を行なった。今回の調査地は、ほぼ全域が筆頭家老中家の屋敷地に想定されていたが、調査の結果、家老屋敷地のほか堀や櫓跡が見つかった。

堀の規模は、最大幅約20m・深さは最大で約5mである。その堀の両側の斜面には、犬走りと呼ばれる平坦面を造っており、東側で幅約1.3m、西側で約2.5mである。そして、西側の犬走り上で検出された櫓跡では、土台上に築いていた石垣は明治時代に入ってからの廃絶に伴い、抜き取られて残っていないかったが、土台を強固にするための裏込めや胴木が残っていた。胴木は、堀のラインと平行して3本見つかった。そのうち2本は長さ約4mの建築材が再利用されており、残りの1本は長さ約4.5mの自然木が使われていた。

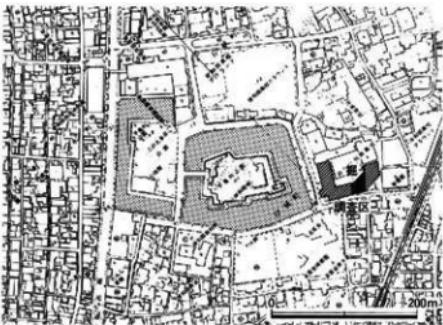
堀の掘削年代および櫓の築造年代は、16世紀末という年代を一定点として与えることができる。とくに櫓跡周辺では16世紀末の軒丸瓦片が比較的まとまって出土した。また、堀の中から出土した陶磁器類のなかでは、16世紀末ごろの肥前系磁器や土師皿などがもっとも古い。したがって、櫓の年代は古式の瓦の再利用などによる残存の可能性を考慮して16世紀末以降、堀の掘削年代は掘浚えによる最古期の遺物の消滅を考慮して16世紀末あるいはそれ以前という年代観が妥当であろう。こ

のことは、天正15（1587）年から慶長3（1598）年ごろまで岸和田城主である小出秀政が城郭整備を行なったことと一致する。

その他堀から出土した遺物では、寛永通寶・塩壺・硯・煙管（キセル）・メンコなどの玩具や木製のお箸・下駄・桶などの曲物・漆器椀・食用にしていた貝の殻などがある。なかには、「天下一御壺塩師 犀見など伊織」の刻印をもつ塩壺や「長州赤間開 鈴木資之」の銘をもつ硯がある。これらの品々は、堀の外側に形成されていた上級武家屋敷から廃棄された品々であると考えられる。また、「正保」年銘をもつ瓦が出土している。この年号は、寛永17（1640）年の岡部氏入封直後にあたり、当時の城郭整備に関わる瓦であろう。

今回見つかった堀や櫓の遺構は、現在に残る江戸時代の絵図に描かれている。正保2（1645）年や江戸末期ごろの絵図では、今回の調査地周辺は筆頭家老の中家の屋敷地とその裏を流れる堀が描かれている。そして、その堀の内側には櫓が描かれている。

格と断定する根拠は、遺構の検出状況に認められる。つまり、裏込めは堀の内側肩ラインに平行するだけでなく、直交する方向にまわり込んで終っている。このことから、一部分にしか石垣が築かれていないことが推定でき、絵図に描かれている櫓と比定してよいものと考えられる。今回の調査により、岸和田城の城郭復元に関する貴重な成果を得ることができた。



第36図 調査地位置図



第37図 堀全景

## 男里遺跡 (96050)

(1) 泉南市男里 (2) 1000m<sup>2</sup>  
(3) 平成8年11月1日～平成9年2月14日  
(4) 府営地域総合オアシス事業泉南地区・双子池改修 (5) 上林 史郎

大阪府の泉州沖に位置する関西国際空港から東南へ約6km、泉南市の南部に男里遺跡は所在する。遺跡は金熊寺川の西、双子池を中心として東西約1.1km、南北約1.3kmの範囲に広がっている。

男里遺跡のほぼ中央に位置する双子池は、大阪市内から和歌山に向かう国道26号線から西北へ約0.8km、府道堺・阪南線から南へ約0.1km、現在の海岸線までは約1kmと泉南地区においては交通至便の地にある。

今回の調査は、大阪府農林水産部から委託をうけて実施した、府営地域総合オアシス整備事業（泉南地区・双子池改修工事）に伴う第2次発掘調査である。

今年度の調査で検出された主要な遺構には、弥生時代後期～古墳時代前期の大溝・落ち込み、飛鳥時代の流路・堰（しがらみ）・溝などがある。また、主要な出土遺物には、弥生土器・古式土師器・須恵器・製塙土器・瓦器などがある。

池の堤体改修工事に伴う調査であるため、設定された調査区は、堤体の形に添ったものになる。

調査区の規模は、総延長約170m、幅約6mをはかり、その平面形態は逆L字型を呈している。調査区北部東端付近で検出された弥生時代後期～古墳時代前期の大溝1は、旧地形に沿う形で東南から西北に伸びるもので、その規模は幅約5m、長さ13m以上、深さ約1.2mをはかる。大溝1の断面は逆台形を呈し、埋土は下層が茶灰色砂質土、上層が暗茶色粘質土である。上層の暗茶色粘質土からは、庄内式土器や布留式土器、製塙土器などがまとめて出土している。

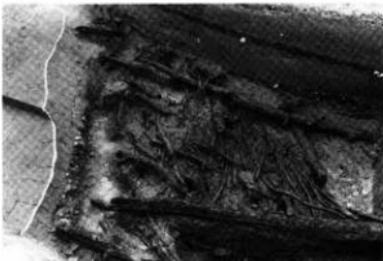
また、北部調査区の中央付近では、東南から西

北にかけて伸びる飛鳥時代の自然流路1が検出された。流路1は、調査の行程上、全幅を完掘できなかったが、その規模は推定長25m以上、幅約14m、深さ1.5m以上をはかるものである。さらに、流路1の東肩から中央付近まで設置された堰（しがらみ）や、流路の西肩及び流路の東肩、流路肩から東南方向に掘削された溝2などが検出された。

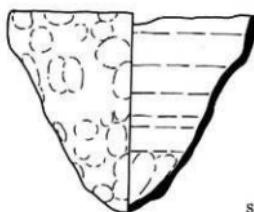
「しがらみ」は、流路1の東肩に直交する形で、径約0.3m、長さ5.5m以上の丸太を約2.5m間隔で2本据えた後、二本の丸太に直交する形で多量の枝材や切断した幹材を立て掛け、その後、暗灰色・シルトで被覆したものである。おそらく、東南方向から来た水をこの「しがらみ」によって制御して、溝2に導水したものと考えられる。なお、溝2からは7世紀頃の須恵器などが出土している。

なお、遺構内や包含層からは、様々な遺物が出土しているが、製塙土器や蟾蜍などが目を引く。庄内式土器に並行する脚台を有する製塙土器が1,140g出土している。さらに、溝3からは、飛鳥時代に属するほぼ完形の製塙土器（鉢形）が出土しており、特筆すべきであろう。

今年度の調査においては、流路や溝、落ち込みという遺構のみで、集落に直接関係するものは検出されなかったが、鎌倉時代以降、双子池は古い流路（谷）を塞き止め、池堤を構築して溜池としたことが土層の堆積より判明した。それ以前の弥生時代～平安時代にかけては、幾本もの溝や流路が旧地形に沿う形で、東南から西北に向けて流れっていたものと考えられる。また、飛鳥時代の堰や導水の機能を有する溝の検出によって、池内周辺で当該期の水田跡が見つかる可能性があろう。



第38図 飛鳥時代のしがらみ



第39図 飛鳥時代の製塙土器（鉢形）実測図（S=1/3）

## 諸目遺跡（96054）

- (1) 泉佐野市上之郷 (2) 556m<sup>2</sup>  
(3) 平成9年1月31日～3月17日  
(4) 府営かんがい排水対策事業（泉佐野地区） (5) 藤田 道子

三軒屋遺跡、諸目遺跡が所在する泉佐野地区では、平成5年度から関西国際空港関連の地域整備事業の一として、農業用水パイプライン布設事業にともなう発掘調査が実施されている。

この調査は農道など生活道路上パイプラインを埋設するのに最低必要な幅1m弱のトレンチを設定して掘削していくものであり、したがって遺跡平面的にとらえることより土層観察を重視した調査となった。

今年度本調査を実施したのは樫井川沿いの道で総延長556mである。調査区の南半分は三軒屋遺跡の範囲に、北半分は諸目遺跡の範囲にふくまれる。調査区の東側は、条里地割りが良好に残る田園地帯がひろがり、この部分では農道は地割りにしたがって碁盤目に走っている。しかしトレンチが設定された道は、樫井川に沿って蛇行しており低位段丘上に広がる田園地帯と樫井川との氾濫原との境界を示すものであり、遺跡の西限のぎりぎりのラインとなると予想された。

三軒屋遺跡に含まれる調査区のトレンチでは、現地表下1m前後掘り下げると樫井川の洪水層と思われる人頭大の石を含む砂礫層が観察できた。



第40図 調査地位置図

少量ではあるが、陶磁器などをふくんでおり、近世以降の堆積であると考えられる。

トレンチが樫井川に接近している箇所で、トレンチを斜めに横切る石組みを検出した。洪水層の上層に築かれており、人頭大の川原石を確認した範囲で3段まで積み上げている。調査区は先述のとおり地形の変化点であり開発に伴い段丘崖に築かれた土留めであろう。三軒屋遺跡のこの地区的開発は近世以降であり、トレンチが設定された道は遺跡の西限ラインであることが判明した。

諸目遺跡に含まれる調査区のトレンチでは、現表下から50cm前後掘り下げると黄橙色粘土もしくは砂礫層に到達する。この砂礫層は三軒屋遺跡のトレンチで観察できた砂礫層と性質がことなり、段丘を形成している層と考える。

旧耕作土、床土を除去すると粘土層に至るところがほとんどであったが、調査区の北端ではこの粘土層上面で古墳時代の溝、土壙を検出した。周辺での諸目遺跡の調査では古墳時代中期前半～後半にかけての土壙や、掘立柱建物が発見されている。さらに三軒屋遺跡北東部と諸目遺跡南部にかかる地域で古墳時代後期の埋没古墳が4基発見されている。今回の調査区で検出した遺物は古墳群造営の時期に相前後しており、調査区の範囲は同時期の集落の南西端に該当するとおもわれる。



第41図 古墳時代遺構面

## 下田遺跡（96065）

- (1) 堺市下田町 (2) 130m<sup>2</sup>  
(3) 平成9年1月8日～2月20日  
(4) 都市計画道路常磐浜寺線建設

(5) 井西 貴子

下田遺跡は泉北丘陵をその源として流れる堺市域最大の河川である石津川の下流域左岸に位置し、東側を「上野芝台地」、西側を「三光台地」と呼ばれる谷平野部が、2つの丘陵と丘陵との合間を北西方向に伸びており、現地表面での標高が7～8m程の微高地に立地している。

今回の調査は1993年以降実施されている府道常磐浜寺線建設に伴う発掘調査時に未売地であった約130m<sup>2</sup>について実施した。

調査地内の層序は3層に大別できる。

第1層 灰褐色粘質シルト。層厚約0.2m。調査区南東壁中央部分において自然河川が検出され、自然河川に伴う自然堤防が幅約2m検出された。この自然堤防部分には包含層の堆積は見られなかった。瓦器片が少量出土した。

第2層 Mn, Fe分混り、灰緑色粘質土。層厚約0.1～0.3m。調査区内では南東方向に向けて約0.1cm地山層が下がっており、第2層も地山層の下がっている上面では厚く堆積する。土師器、須恵器の小片が出土した。

第3層 地山層。淡青灰色+茶褐色粘質土。

遺構面は地山層で1面検出した。自然河川の自然堤防上で小穴2基、土坑1基を検出し、自然河川がオーバーハングして堆積した灰緑色粘質土層上面（自然堤防）で、小穴8基を検出した。遺物がほとんど出土しなかったので、時期を限定するのは非常に難しいが、第2層出土の遺物が奈良時代におさまるので、奈良時代を下がらない時期が相当できるかと考えられる。

今回の調査は、調査面積が狭かったため、自然河川の両岸、底等を検出することができなかつた

が、1993、1994年度に実施されている調査において検出された遺構の間をつなぐことができた。旧石津川の分流と考えられる自然河川は両岸に自然堤防を形成し、自然河川がある程度安定した時期から、集落が営まれたものと思われる。



第42図 調査位置図



第43図 自然流路検出状況



第44図 遺構全体図 (S=1/400)

## 新堂廃寺 (96067)

(1) 富田林市綠ヶ丘 (2) 240m<sup>2</sup>

(3) 平成9年1月14日～3月31日

(4) 府営富田林北住宅(第1期)建替

(5) 井西 貴子

今回の調査は府営「富田林北住宅」建て替えに伴う埋管設置に伴い実施したものである。調査箇所は新堂廃寺の東側、南北に(約140m)長いトレンチ調査である。

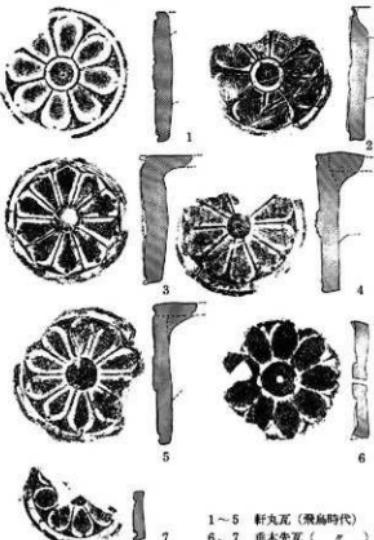
今回の調査で検出された遺構で、特筆すべきものとして溝1とDトレンチの落ちがある。溝1は1995年度調査の溝5とつながる溝と考えられる。この溝は寺院の東側に8世紀中葉から9世紀中葉に展開される集落を区画する溝である。その溝5が今回の調査区のBトレンチで検出した溝1とつながれば、この溝は寺院東側の集落を画する溝として機能し、その集落は1960年度に検出された伽藍の中央建物(金堂)のほぼ東まで集落が展開していたものと推測される。

Dトレンチで検出した落ちは、出土した平瓦が奈良時代に属する時期に相当することから、新堂廃寺再建に伴う遺構である。瓦の検出状況が、多量の瓦を遺棄した状況(小破片が多量に検出される状況)ではなく、ほぼ完形の平瓦の比率が高かったことから、付近に瓦を使用した遺構があるものと推測される。遺構の性格については調査面積が狭いため限定することはできないが、再建後の寺院の東側を画するものか、寺院東側の集落を画すると考えられる溝から約1.5m西側で検出されていることからどちらかに伴う遺構であると推測される。瓦積基壇を推定するには、上面が削平されていることを考慮にいれても瓦が整然と積み上げられている状況が確認できなかったことから無理があると思われる。

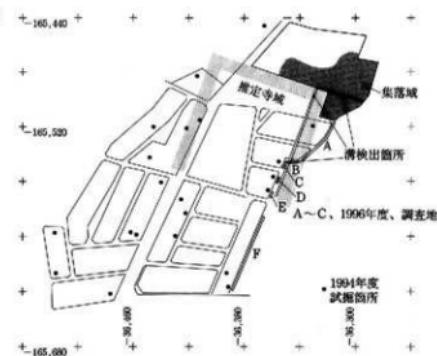


第45図 調査位置図

今年度は1996年度調査の整理事業も実施した。軒丸瓦は13形式16類に、軒平瓦は4形式5類に分類される。また、垂木先瓦(第46図6)は飛鳥寺と同様であることが確認された。



第46図 出土軒丸瓦実測図



第47図 調査区配置図

## 中の社・宮の後遺跡 (96069)

(1) 岸和田市積川町 (2) 72m<sup>2</sup>

(3) 平成8年11月18日～12月3日

(4) 主要地方道岸和田牛滝貝塚線建設

(5) 桜本 哲

大阪湾に注ぐ大津川上流の3本の支流のうち、もっとも南から合流するのが牛滝川である。この流域に沿う府道磯の上山直線の建設に伴ってこれまで下流から上流へ調査が進められてきた。今回調査対象とした建設予定区域は中の社・宮の後遺跡が所在する積川町で外環状線に接続する一応の区切りとなる地点であり、工期的に制約される要素があった。そのため事前に両遺跡の範囲で遺構・遺物のさらなる分布密度を確かめ、より詳しいデータを得る目的で、買取地全域を対象としたグリッド調査による試掘を実施した。調査は現集落の狭隘な町道や畑地に掘削機械を運び入れることが困難であったため、1m×2mの試掘坑を36箇所にわたって設定し、すべて人力により掘削した。

調査対象区域の全域で、10～40cmの耕作土以下に灰色・褐色・黄色の濃淡を呈する一連の粘質土の堆積が確認された。地点により量的に若干の違いはあるものの、これらの土層からは土師器・須恵器・瓦器の破片が出土した。これにより中世の堆積層と判断した。しかし明確な遺構を検出でき

たのは、積川神社裏を流れる牛滝川支流を挟んで、その南側の段丘面である。ここ宮の後遺跡の範囲では現地表面からかなり浅く、深さ40cm以内で達する砂混じりの粘質土上面において径約20cmのピットを数箇所で検出できた。瓦器の破片がまとまって出土した箇所もある。おそらくこの支流の左岸段丘端から、現在の外環状線への接続部までの約150mの範囲に中世の建物を含む遺構の集中する箇所が想定できよう。同じような出土遺物は北の対岸の中の社遺跡の範囲にかかる段丘面でも検出できたが、未買取地がかかっていたため、ここでの遺構についてはあまりはっきりしない。中の社遺跡北半部では地形が北西に向けて低く延び、掘り下げるにつれて出土が多く、土質も軟弱となる。明確な遺構とおぼしきものは検出できなかったが、中世遺物を出土する粘質土の下で、サスカイト製石器ほか石片、縄文あるいは弥生と思われる土器片がわずかながら出土している。

以上の結果から、建設工事にあたっては全域の本調査が必要と判断した。



第48図 調査区位置図

# 木の本遺跡 (96070)

- (1) 八尾市木の本2丁目 (2) 30m<sup>2</sup>  
 (3) 平成9年1月13日 (4) 平野川改修 (5) 亀島 重則

工事に先立って、試掘調査を行った。試掘坑は、工事区の上・下流の両端に2箇所設定した。

試掘坑A（下流寄り） 川底に堆積するヘドロ層の下、約1mで、厚さ0.3m弱の灰色粘土が堆積する。上部層を中心に古墳時代中・後期の土器片が出土する。土器（布留式）を主体に、5・6世紀の須恵器・弥生土器（後期～終末期）が出土。この遺物包含層の下面に接して、明緑灰色粘土が広がる。上面は、湧水が多く、精査が困難で遺構の検出ができなかったが、既掘地点での所見に照らして、遺構面と考えてよい（O.P.8.9m）。この遺構ベース土は、下へ明緑灰色微砂質粘土、明緑灰色微砂と続くが、土質は粗粒になる。これらの土層から、遺物は出土していない。また、調査区南端では、現平野川の最下層あるいは、旧平野川の堆積砂層から、施釉陶器片が少量出土した。

試掘坑B（上流寄り） ヘドロ層の直下から、旧平野川の厚い砂層が、O.P.9.3m（最深部、厚さ1m）まで堆積する。北端部では、川の肩が検出された。土器・陶器・施釉陶器・磁器・丸瓦片が少量出土した。南端では、重複して現平野川の堆積層がみられる。高さ約9.3mで古墳期包含層が確認された。試掘坑Aより0.2m高い。しかし、下面では8.6～8.7mで、0.3～0.2m低い。近くの既掘地点と比べると、包含層の厚さは、同じであるが、遺構ベース面が0.1～0.2m高い。なお、包含層の中位で遺構らしい輪郭をとらえ、精査したが、湧水が激しく、その当否は不明のまま

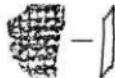
となった。古墳期が2面の可能性がある。包含層から出土した遺物は、土器（布留式中～新）を主体とする。他に傳式系土器片（外面格子目叩き）1点、庄内式？壺片がある。

ヘドロ層の直下には、近世の旧平野川の跡が確認された。試掘坑Bでは、調査区北端で右岸側の肩を検出しており、試掘坑Aでは、明確にできなかつたが、調査区の南端もしくは、区外に右岸がくるものと思われる。出土した陶磁器類には、唐津焼皿、肥前系碗の施釉陶器、丹波焼・在地産摺り鉢、土鍋？の陶器、伊万里？青磁がある。いずれも17世紀を中心とした時期を示し、検出された旧平野川の堆積時期を17世紀とみる。

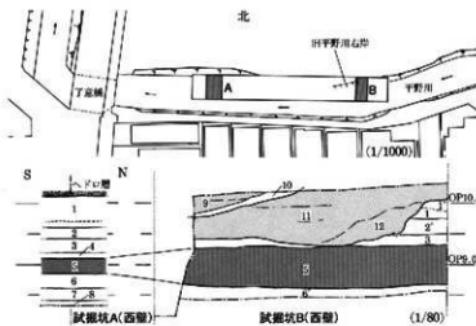
第1～4層の灰色系粘土層は、遺物の出土がなく、堆積時期の決め手を欠く。しかし、周辺での調査成果からは、古代から中世まで遡ることも考えられる。工事区が条里の坪境に重なる点もふまると、水田関係の遺構の検出も予想される。

古墳期包含層は、土器（布留式）を主体とし、少量須恵器が混じることから、古墳時代中・後期の堆積と考えられる。今回遺構の検出はできなかつたものの、既掘地點（掘立柱建物などを検出）にも近く、立地や時期も共通することから、同様の遺構が検出される可能性が高い。

試掘の結果から、事業者と協議し、本調査を実施した。



第50図 神式系土器実測図(S=1/2)



第49図 調査区全体図、土層断面図

1. 深色 (SY5.5/1) 粘土、上部はグリナイト化して、明緑灰色 (10GY7/1) と並びる。スミ粒を少し含む。  
 2. 深色、明緑灰色 (10GY7/1) 粘土、明緑灰ノジュール粒を少し含む (2%)。  
 3. 深色 (SY5/1) 粘土、明緑灰ノジュール粒を少し含む (5%)。  
 4. 黄褐色 (2.5SY7/1.5) 微砂質粘土、含 2 mm以下の砂が少し混じる。明緑灰ノジュール粒を含む (5~7%)。  
 5. 深色 (7.5SY7/1) 粘土、上部を含む。スミ粒を少し含む。明緑灰ノジュール粒を含む (上部に限られ、1%以下)。古墳期包含層。  
 6. 明緑灰色 (7.5GY7/1) 粘土、5層由来？の灰色粘土が斑状に入る。  
 7. 明緑灰色 (7.5GY7/1) 粘土質粘土。  
 8. 明緑灰色 (10GY7/1) 粘土、中や軽質砂質粘土。  
 9. 深色 (7.5Y7/1.5) 粘土、含 2 mm以下の砂。  
 10. オリーブ色 (5GY7/1) 砂質質粘土。  
 11. 黄褐色 (7.5SY7/1~8/1) 粘土、径 1 m以上下体、最上部は径 3 m以上下部は 1 m以下。  
 下層は厚さ約 7 m。  
 1. 大きなレシガシが少し落ちる。  
 2. 深褐色 (10GY6/1~7/1) 鹿蹄質粘土や泥炭 (10Y7/1~8/1) 施釉砂器 (Ia) のブロックが1層に混じる。  
 3. 明青灰色 (5GY7/1) 粘土、試掘坑Aの1.0 mに判明。鏡面が入る。  
 4. 明緑灰色 (7.5GY7/1) 粘土、試掘坑Aの0.6 mに判明。  
 5. 明緑灰色 (10GY7/1) 粘土、試掘坑Bの0.6 mに判明。

## 大和川今池遺跡（96072）

- (1) 松原市天美西 (2) 1430.0m<sup>2</sup>  
(3) 平成8年11月5日～平成9年3月14日  
(4) 今池処理場増設 (5) 岩瀬 透

大和川今池遺跡は、昭和52年の今池処理場建設工事に先立つ試掘調査の際に新規発見され、周知の遺跡となった。以降、建設工事に伴って発掘調査が実施されている。現在の遺跡範囲は、今池処理場を中心として、東西約1km、南北約1.45kmと想定されている。

これまで大和川今池遺跡調査会、大阪府教育委員会、松原市教育委員会、堺市教育委員会などにより調査が実施されており、弥生時代から近世に至る、多くの遺構・遺物が検出されており、同遺跡が一大複合遺跡であることが判明している。

今年度の調査対象地区は、今池処理場の北端部にあたる焼却炉建設予定地で、近辺では、従前の調査によって古墳時代前期の掘立柱建物、古代の道路跡の「難波大道」、平安時代後期からの寺院跡「觀音堂廃寺」関連の遺構などが検出されている。

調査区は処理場以前の擾乱がはげしく、遺存状況が非常に悪かったが、それにもかかわらず以下の知見が得られた。

### 弥生時代後期以前

南東から北西方向に流れる自然河川を検出した。一部にトレンチをあけて掘削したが、遺物は出土しなかった。従前の調査の際に同様の流路が検出されており、検出面と位置関係からみて同一の遺構と考えられ、これより弥生時代後期以前とした。

### 古墳時代前期

堅穴住居の可能性がある土坑2基、1間×1間の掘立柱建物1棟、溝などが検出された。大和川今池遺跡調査会により調査された、南東に隣接す

る地区でも同様の建物が検出されており、ともに遺物は少ないが、布留式土器が出土している。

### 古墳時代後期

掘立柱建物3棟、溝、土坑などが検出されている。遺物は少ないが、6世紀に比定できる須恵器が出土した。

### 近世～近代

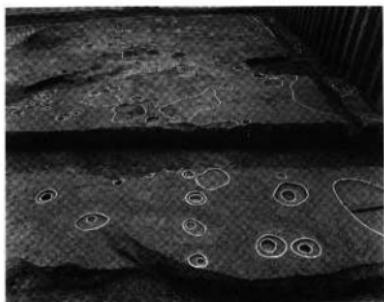
この時期は当地一帯は耕地化されていた。調査区では耕溝が多数検出されているが、畦畔は確認できなかった。周辺の調査でも、農耕に使用したと考えられる径1m～2mの素掘り井戸が多数検出されている。



第51図 調査位置図



第52図 流路検出状況



第53図 掘立柱建物

## 木の本遺跡（96073）

- (1) 八尾市木の本1丁目 (2) 172m<sup>2</sup>  
(3) 平成9年2月10日～3月7日  
(4) 平野川改修 (5) 藤澤 真依

木の本遺跡は大阪府の東南部八尾市に位置する古墳時代を中心とする弥生時代～中世の集落跡である。調査地は八尾市木の本1丁目で西流する平野川が八尾南高校の南端で北に屈曲する部分にかかる了意橋の東側である。

### 層序

調査区は最大幅4.8m、延長38m、面積は172平方メートルである。調査の結果確認した土層は8層で、以下の通りである。

第1層 黒色ヘドロ・盛土であり、層厚は約1mである。

第2層 灰白色砂（2.5G Y8/1）であり、層厚は0.2mである。調査区南半部旧平野川底の堆積である。上面の標高はT.P.+10.85mである。遺物は近世の染め付けが出土した。

第3層 緑灰色粘土（10G Y6/1）であり、層厚は0.3mである。調査区北半部旧平野川肩部を形成している。上面の標高はT.P.+11.4mである。遺物は出土しなかった。

第4層 緑灰色粘土（10G Y6/1）と灰色粘土（7.5Y4/1）のブロック層であり、層厚は0.5mである。上面の標高はT.P.+11.1mである。遺物は出土しなかった。

第5層 黒褐色粘土（2.5Y3/2）であり、層厚は0.15mである。上面の標高はT.P.+10.6mである。遺物は6世紀の須恵器を僅かに出土した。

第6層 調査区北半部に堆積した灰色砂（N6/）であり、層厚は0.1mである。上面の標高はT.P.+10.5mである。遺物は土師器小破片が少量出土した。

第7層 調査区西北端から東南端に溝上に堆積した青灰色粘土（10B G5/1）であり、層厚は0.2mである。上面の標高はT.P.10.45mを測る。遺物は少量の布留式土器と数点の須恵器破片を土した。その他には縄文時代晩期の突帯文土器片が極少量出土した。

第8層 暗灰色粘土（N3/）であり、層厚は0.2mである。上面の標高はT.P.+10.45mである。遺物は古墳時代前期の庄内式土器が多量に出土した。

第9層 緑灰色粘土（10G Y6/1：同色砂混じり）であり、層厚は0.7mである。上面の標高は

T.P.+10.25mである。遺物は出土しなかった。

### 遺構と遺物

調査は第3・4・5・6・7・8・9層上面で行ったが、明確な遺構は第1・6・7面で検出した。

第1面は第3層の緑灰色粘土（10G Y6/1）上面である。調査区南半部が東西方向に伸びる旧平野川であり、幅4.0m以上、長さ約40m、深度0.7m、埋土は第2層白色砂（2.5G Y8/1）である。遺物は近世の染め付けが出土した。

第6面は第8層暗灰色粘土（N3/）上面である。第7層は溝状に確認したが、第8層が窪んだ部分に堆積した粘土層である。遺構は幅1.0～2.0m、深度0.1～0.3mの南北から東北方向の溝を5条検出した。古墳時代の土師器を少量出土した。庄内式土器と布留式土器を含んでいる。

第7面は第9層暗灰色土（N3/）上面である。遺構は溝2条、土坑1基、ピット1基を検出した。溝は西北端から東南端を結ぶ幅1.5～2.0m、深度0.15～0.25mの溝と中央部から伸びる幅1.5m、深度0.2mの溝がある。前者が後者を切っている。両溝からは多量の庄内式土器が出土した。土坑は溝の西南で直径1.5m、深度0.6mを測る。埋土は4層で3層目から庄内式の壺5点と壺1点を出土した。ピットは直径0.3m、深度0.5mを測る。埋土は黒色粘土で遺物は出土しなかった。第7層は第7面の溝の影響で第8層が窪んだ部分に堆積した土層であることが第7面の調査結果から明らかになった。



第54図 井戸SK10遺物出土状況

大阪府教育委員会文化財調査事務所年報 1

1998年 3月31日

発行 大阪府教育委員会

編集 大阪府教育委員会文化財調査事務所

